# The Elder Scrolls FMC：ORARIO（旧題：ダンジョンで贅沢を目指すのは間違っていない。）

熱狂的なファン

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

傭兵として活動していたダークエルフは稼ぎに限界を感じていた。そんな時に迷宮都市オラリオの話を聞いた。

オラリオならば巨万の富が手っ取り早く得られると。

傭兵業の引退を考えていたダークエルフは、すぐにオラリオへ向かった。

果たして彼は富を得ることができるのであろうか。

# 目次


1 …… 1

2 …… 17

3 …… 33

4 …… 46

5 …… 65

6 …… 77

7 …… 95

8 …… 107

9 …… 123

10 …… 140

11 …… 153

# 1

ある日の昼前。青い空には白い雲が所々にあり、まだ斜めの太陽はその街を照らしていた。

大国の王都にも劣らず、いや優るかもしれないほどの大都市。その中心にそそり立つのは白亜の摩天楼【バベル】。世界最高レベルの高さの建築物だ。

この街は【オラリオ】。迷宮都市と呼ばれる、世界最高と呼ばれるほどの都市だ。

その街の東西南北の大通りがバベルへ向けて収束されている。まるで巨大なピザを四等分にしているかのようだ。

そんな通りの中の一つ、西のメインストリートの人込みの中に彼はいた。

変わり者の多いオラリオにおいても、彼の恰好は尚変わっていた。軽装の鎧を纏っているが、そのデザインは無駄な装飾を削ぎ落した流線形で、実用性を重視しているということは見て取れるが、その装甲に使われている物は金属ではなく虫か何かの甲殻のように見える。故にという訳ではないが、そう考えると鎧もどこか虫っぽい。

くすんだ赤の布マスクのせいで顔の見えない彼は、しかし堂々とした様で歩いており、真っ直ぐにバベルへと向かっていた。

そして、バベルの中へと入った彼はその内部を見回す。
とんでもなく広い。一階部分の部屋にすぎないというのに、外にある闘技場が三つか四つ、すっぽりと収まりそうなほどに広く、天井も高かった。
これだけ広ければ、彼の探している物もすぐに見つかる。彼の定めた視線の先、そこには部屋の中心に空いた大きな穴と、その下へ向かうための長く広い階段があった。
その階段へと向かい、手前にある大きな門をくぐろうとした時だった。
「ちょっと待った」
門の両側に立っていた門番が彼の前に立ちふさがり、何やら虫メガネのような物を通して彼を見ていた。
「やっぱりな。お前、無所属どころか恩恵も受けていないじゃないか。それじゃあ、この【ダンジョン】へ挑むことは認められないな」
彼はマスクの下で眉を潜める。まさか、止められるとは思ってもみなかったからだ。
「もしもダンジョンに入りたいのなら、どこかの派閥に所属し、そこの神から恩恵を授かることだ。詳しくはこの建物を出て北西方向へしばらく歩いた所にある万神殿（パンテオン）で聞け」
門番はそう言うと彼を「通行の邪魔だ」と門の端の方へ追いやった。
彼はマスクの下でため息を吐くと、門番が言った通りにバベルから出て、北西へ向かうのだった。

衛兵の言っていた万神殿に着くのにはそれほど時間はかからなかった。
何本もの白い柱で屋根を支えた巨大建造物。どっしりとした佇まいはどこか神聖さすら感じる。
だが実際に中に入ってみると、そこは神聖さとは少し違う雰囲気の場所だということがわかるだろう。
「いらっしゃませ。本日はどのようなご用件ですか？」
「ランクアップですね。おめでとうございます。それでは、此方の用紙に必要事項の記入をお願いします」
「今の状況だと、中層への進行は困難だと思われます。もう少しステイタスを向上させることをおすすめします」
入り口をくぐってすぐの大部屋には壁から壁まで伸びるほど長いカウンターがあり、それを挟んで武装した者達と揃いの制服を着た職員が話をしていた。それも、何やら手続きやら契約の相談ばかりだ。この建物、外装は神殿だが中身は役所のようなものらしい。
男は、ここであの穴の中に入るための手続きをするのだろうかと考え、とりあえず適当なカウンターに近づいた。
「おい！　そこのあんた！」

カウンターの向こうにいる職員に声をかける。男の声のクセなのか、怒鳴っているように聞こえたためその職員はビクッと肩を震わせ、恐る恐る振り返りカウンターに近寄った。若い人間の女性職員だ。

「な、なんでしょうか？　どのようなご用件でしょうか？」

いきなり怒鳴りつけられた上、相手の顔はマスクで見えないため、男の機嫌が分からない彼女は少し恐怖を味わうことになるだろう。

男はカウンターに手をつく。

「あの巨大な塔の地下、ダンジョンへ入りたいのだが、初めてここに来たものでな。何をどうすればいいかわからんのだよ。手続きが必要ならそれを教えてもらいたい」

「あ、え、は、はい！　冒険者になりたいのですね！　その窓口はここです！　少々お待ちください！」

クレーマーにでも絡まれたと思っていた少女は男の話を聞くと急に安心し、カウンターの下に屈んで資料を取り出して顔を上げる。

「ええと、新規の冒険者登録の方でお間違えないですね？」

「そうだよ」

「それでは、お名前を含めてこちらに必要事項の記入をお願いします」

男は手渡された用紙にサラサラと記入をしていく。名前は【レヴァン・ザール】。種族

はダークエルフ。その他もろもろの記入。
だがあるところでザールの手が止まった。彼は用紙を手に持つと、ある項目をペンで指し示した。
「この派閥という項目には何を記入すればいい？」
「ええと、そこには所属している派閥（ファミリア）を記入していただきます。無論、オラリオの派閥に限定されますが」
「何？　冒険者になるにはどこぞの組織に加入しなければいけないのか？」
疑問を漏らすザール。
「は、はい、そうです。もし、どこにも所属されてないようでしたら、こちらから新規眷属の募集をしている派閥をいくつか紹介させていただきますが」
「ああ、よろしく頼む」
職員はカウンターから離れる。しばらく待っていると、彼女は資料の束を手に持って戻ってきた。
「お待たせしました。これが現在募集をしている派閥の資料です。その中のどれか、いえ、その中にない派閥でも所属したのならばもう一度ここに戻ってきてくださいね」
ザールは資料を受けとり、軽くページをめくる。ダンジョン攻略系派閥から、商業、農業、家事、そしてなぜか娼館の募集まで入っている。ザールは無言の下、それを束から

弾いた。
「それじゃあ、どこぞに所属することになったらまた来るよ」
「はい！　お待ちしております！」
ザールは資料片手に万神殿を後にする。とりあえず、弾いた派閥以外を適当に回ることにして、彼は街に繰りだした。

◆

「クソッタレどもが！」
狭い路地に入ったザールは路上に転がっていた石に苛立ちをぶつけた。蹴り飛ばされた石は十数Mとんだ所で見えなくなる。
ザールはギルドから出てから数件の派閥に立ちより、面接を受けたがどこからも良い返事をもらえなかった。
原因はわかっている。面接でザールが兜を脱ぐと、担当していた者達の表情が歪んだ。表情を変えなかった者達も内心では彼を蔑んでいただろう。
ザールはダークエルフだが、出身は火山の麓にある国アッシュランドだ。そこのエルフたちは他のエルフとは異なり、肌は黒か灰色、黒い眼球に赤い瞳といった目は吊り上がり、眉骨や頬骨が浮き出た容姿をしている。他の種族の基準から言えば醜い容姿をしている者が殆どだ。

彼等は過去、その醜い容姿からエルフとは認められず、また魔物として駆逐されかけたこともあった。今でこそ学会の研究によって彼等もダークエルフから分岐した種族だということがわかっているが、それでも差別は根付いている。それはこのオラリオにおいても例外ではなかったようだ。

「アッシュランドのダンマーで何が悪い！　脳無しどもが！」

誰もいない路地裏で一人叫ぶザール。

彼は長年傭兵をやってきたため、剣と魔法の腕には自信があった。だがアッシュランドのダークエルフというだけで不合格になっている。中には明らかに嫌悪の眼差しを向けてくる者さえいた。

「クソ！　これじゃあ、何のためにオラリオに来たんだか……」

適当に歩いて見つけた階段に腰掛けるザールは、片手で頭を覆った。

別段、彼がこのオラリオに来たのに深い理由があるわけではない。以前一緒に仕事をしたことのある傭兵と久しぶりに再会した時、彼は以前よりもずっと強くなっていたし、何より羽振りが良かった。どうもオラリオで冒険者として鞍替えしたらしい。

近頃は傭兵稼業も稼げる額に限界が見えてきていたのでこいらで引退を考えていたが、オラリオで冒険者をやれば同じ期間傭兵稼業をやるよりもずっと稼げると聞いてやってきたわけだ。

だが結果はこの通り。オラリオは様々な種族が集まっているところと聞いていたので、種族差別はあれどそこまで露骨ではないだろうとザールは考えていたが認識が甘かったようだ。

（考えてみれば、ここにくるまでにすれ違う千人以上の様々な種族の中に同胞（アッシュランドのダンマー）はいなかった。ここでも我々は侮蔑の対象というわけか）

懐を漁って財布を取り出す。オラリオの一般的な宿泊施設の料金は知らないが、恐らくザールがここに留まれるのは二日程度だろう。それまでの間にどの派閥にも所属できなかったのなら、オラリオから出て再び傭兵に戻るしかない。引退を考えていたところでまた戻るのは気が滅入るが、この際仕方がないとしか言えない。

ザールは手元の束から自分に不合格を言い渡した派閥の資料を抜き取ると、それを丸めて階段の下にポイ捨てする。彼はあまり良識のある方ではなかったし、不当に不合格を言い渡した連中のことなど思い出したくもなかった。

ふと、そのすぐ後。階段の下から少女が上ってきた。漆黒の髪を二つに束ねた髪形をしており、白いワンピースを着ている。そして、幼げながらも人間とは思えないほどの美貌を持っているが、その顔は怒って頬を膨らませていた。

「君かい！　階段の上からゴミを投げつけてきたのは！」

少女は手に先ほどザールが投げ捨てた資料があった。わざわざ拾ってまで文句を言

いに来たらしい。
　だが不貞腐れていたザールには正当な抗議であっても、鬱陶しいものにしか感じなかった。
「はいはい、申し訳ありませんでした。これで満足か？」
「なんだいその投げやりな返事は！　もっと真面目にごめんなさいって言えないのかい!?」
　少女の黒髪がまるで生き物の尻尾、あるいは猫の毛のように逆立つが、ザールはそれに対して鼻を鳴らして無視を決め込む。そして、再び資料の束に目を通した。時間がもったいないし、ここからはえり好みせずに手あたり次第に志願するしかない。
　ふと、ザールの態度に顔を真っ赤にして怒りを募らせていた少女は彼の資料を見るとフッと落ち着き、彼の横に回り込んでのぞき見をする。
「君、派閥（ファミリア）を探しているのかい？」
「だとしたらなんだと言うんだ。もういいだろう、考え事をしているんだからあっちに行け」
　ゴミを投げつけられた上、そっけない態度を取ったザールに再びイラッとした少女だったが、我慢するように深呼吸をして落ち着いた。
「ふ、ふふん。ボクにそんな態度をとってもいいのかなぁ～？　君がどこかの派閥（ファミリア）に入

りたいと考えているのなら、ボクを無視できないはずだよ？」
「何？」
　ザールは資料から目を離して少女に視線を向ける。
「それはどういう意味だ？」
　少女は腰に手を当て、得意げな顔で「フフン」と鼻を鳴らす。
「何を隠そう、ボクも派閥（ファミリア）を持った神なんだよ！」
　自信満々に言う自称神だったが、マスクの下のザールの表情は懐疑的だった。
「お前がぁ？　神い？　冗談はよしてくれ。お前みたいなちんちくりんが神であるものか。神様ごっこならオトモダチとやるんだな」
「な、な、な、ナニをおおぉぉぉ！」
「うわ！」
　怒りが爆発した少女は猫のようにザールに飛びつき、兜の上から彼の頭をポカポカと叩く。まさかこんな少女が跳躍してくるなど想像もしていなかったザールは完全に不意を突かれた。
「な、何をする！　やめろ！」
「うるさい！　アイツみたいなこと言いやがって！　誰がちんちくりんだ！　天誅！　神罰を受けろ！　この！　この！」

まさか子供に乱暴するわけにもいかず、ザールはどうにか暴力を用いずに振りほどけないかと四苦八苦する。

だがその内に、少女に触れられているところから何かが伝わってくるのを感じ、動きを止めた。

「まさか、本当に……」

ザールは未だ憤る少女の脇を掴んで自分から引き離し、地面に下ろす。

「本当に神なのか？」

「そうだって言っているじゃあないか！　まったく、近頃の子供は見る目ってやつがないね！」

頬を膨らませて顔をそむける少女。だがザールはそんなことはお構いなしだった。

「ならば丁度いい！　私をお前、いや貴女の派閥に加えていただきたい！」

「な、なんだか随分と現金なヤツだな君は。で、でも！　僕の派閥（ファミリア）に入りたいって言うなら、まずは今までの無礼な態度を改めてキチンとごめんなさいを――――」

「ああ、ああ！　今までの態度は謝罪する！」

食い気味なザールに少女は引いたが、せっかくの志願者なので無下にするのも憚られた。

「ま、まあ、それならいいけど……でも、いいのかい？　誘っておいてあれだけど、ボク

の派閥（ファミリア）は発足したばかりで、団員も一人しかいない零細派閥だけど……」
「ダンジョンに入れるのならどうにでもなる。私を貴女の派閥に加えてほしい」
　ザールの強引な手口に少女は気圧されてしまう。元々加入を勧めていたのは彼女なので返事がイエスなのは当然と言えば当然なのだが、名前も知らない相手をいきなり加入させるのは違うだろう。
「よ、よし！　わかった！　わかったから落ち着いて！　とりあえず、ボクの本拠地（ホーム）で自己紹介がてら面接でもしようか」
　ザールとしてはすぐにでも加入してダンジョンへ赴きたいところだが、そう急いでも少女の都合というものもあるだろうと考え、ここは黙って彼女についていくことにした。
　小さな少女の後からついていくマスクの男という構図は、他者から見れば非常に危険を感じる光景であろうが、その動機に不純なものはない。
　少女に導かれるままに路地を行く。だが先ほどの場所から離れる旅に、周囲の景色が変わっていく。建物はぼろくなってきて、道の舗装も雑になっていく。次第にザールは騙されたのではないかと不安になっていくが、いざとなったら逃げられるだけの脚は鍛えているという自信はあった。
「ここだよ！　ここ！」

そうして行きついたのは古ぼけた廃教会だった。白土の塗装が剥げてしたのレンガは露出しており、その上には植物の蔦が這っている。だがそんな所であっても、周辺の建物は殆どが半壊しているおかげでこんなボロ屋ですら立派に見えた。

扉をくぐって教会内に入ってみると、内装も案の定だった。床の隙間からは草がボウボウに生えており、天井には穴が空いていて日の光が入りこんでいる。

「ちょっと待っててくれよ。すぐに準備してくるからね」

少女はそう言って教会の奥の方へ消えていった。

「日光浴には最適だろうな……」

教会内を軽く見回してザールはそうつぶやく。自分で零細と言っていたので宮殿のような豪邸は期待していなかったが、まさか廃墟に連れてこられるとは思ってもみなかった。

だがザールは贅沢など言っていられないだろう。他に候補はあるがアッシュランドのダンマーを受け入れてくれるところは早々見つからないだろう。あの少女神もマスクを取ったザールを撥ねのけるかもしれないが、路上で喧嘩した相手を誘うほど切羽詰まっているようなのが人種で加入員を選ぶとは考え難い。

「おまたせー!」

比較的まともな長椅子を見つけたのでそこに腰掛けようとした時、少女神が出てきて

祭壇の前に立った。ぱっと見で変わったところと言えば、手にクリップボードを持っている事と、眼鏡をかけていることくらいだ。
「それじゃあ面接をはじめよう！　こっち来てこっち！」
どこかウキウキした様子でザールを招く。彼は誘われるがままに女神の前に立った。
「それじゃあ、自己紹介からしようか！　と、その前に、その兜を取って顔を見せてくれないかい？　眷属になるかもしれないんだから素顔は把握しておかないと」
もっともな言い分だが、ここにくるまで散々容姿、或は人種のことで不採用になってきたのであまり気のりしなかった。だが傭兵ならともかく、組織に加入するとなれば顔を明かさないのは許されないだろう。
ザールは兜を脱いだ。アッシュランドのダークエルフ特有の顔が晒される。
「うん？　うぅ～ん？　申し訳ないけど、君の種族は見たことがないな。耳が尖っているから、エルフなのかい？」
だが女神の反応は予想に反していた。好き嫌い以前にザールの種族のことを知らない様子だった。
「ああ、そうだ。私はアッシュランドのダンマーだ。私の容姿についてとやかく言うなら、ここから去るが」
「ああ！　待った待った！　そんなことで文句を言ったりしないよ！　しかし、ダン

マーっていうとダークエルフのことだね。随分と古い名前を使うんだね」
「一般的なダークエルフと差別化するためだよ。連中は我々と同一視されることを嫌がるし、こっちとしても連中の縁者だなんてゴメンだからな」
兜を小脇に抱えて嫌だ嫌だと首を振るザール。一般的なダークエルフとアッシュランドのダークエルフはその歴史上、何度も戦争をしてきた歴史がある。その為、両者の仲は同種族だというのに険悪だ。
女神はこの話を掘り下げたら暗い話にしかならないと踏み、これ以上は詮索しないことにした。
「まあ、気を取りなおして自己紹介しよう。ボクの名はヘスティア！　炉の火と家庭生活の守護神さ！　好きな物はジャガ丸くんで、嫌いな物は男みたいな胸をしたアホ女神！　それじゃあ次は君！」
ザールはジャガ丸くんとやらも、アホ女神とやらも知らなかったが、とりあえずヘスティアの人となりは今までのやり取りである程度は把握できていた。恐らく人を騙したり貶めたりするような邪神ではないだろう。
ザールも自己紹介することにした。
「名前はレヴァン・ザール。さっきも言った通り、アッシュランド出身のダンマーだ。ここにくる前は傭兵(オラリオ)としてあちこちで戦いに参加していた。剣と魔法の腕には自信が

あるが、それ以外は期待しないでくれ」
傭兵という経歴はダンジョン攻略派閥として活動しているヘスティアからすれば願ったりかなったりの人材だ。
だが即座に加入を認めるわけにはいかない。見た目で決めつけているわけではないが、ザールが悪人である可能性もあるのだ。それを見極める必要がある。
その後はいくつかの質疑応答をし、ザールが悪人ではないという判断をしてヘスティアは決断を下した。
「うんうん！　君はまさにボクが求めていた人材だよ！　加入を認めよう！　ようこそヘスティア・ファミリアへ！」
その言葉を聞いたザールは内心胸をなでおろした。これで彼はオラリオで冒険者として活動ができる。
すぐには無理だろうが、贅沢な暮らしをするための一歩は踏み出せそうだ。

# 2

廃教会の地下は居住スペースになっていた。元々ワインなどを保存していた地下倉を改装したらしいが、ソファやテーブル、魔石灯などが持ちこまれており、かなり快適になっている。人によっては子供のころに友人と作った秘密基地を思い出させるだろう。

その地下室のソファに腰掛けているザールは上半身裸だ。細身だが鍛えられた灰色の身体には無数の傷が刻まれている。長い傭兵稼業による勲章のようなものだが、これほどの傷ができるまで生き残っている戦士は珍しいだろう。

そのザールの背中を見つめているヘスティアは、彼の身体の傷を悼むように撫でる。ザールの場合冒険者と同じくらい危険な生き方をしてきただろうことは、体中の傷を見れば想像に難くない。

（過酷な人生だったみたいだね。でも大丈夫さ。これから君はボクの眷属（家族）になるんだから！）

ヘスティアはザールの背中から手を放すと、反対の手に持っていた針で自分の指を刺した。針を放すと彼女の白魚のような指先から、神聖な血液が紅玉のように溢れる。

ヘスティアはその血をザールの背中に当て、絵を描くように指を動かす。すると、塗りたくられた赤い血液が一人手に動き、黒色に変色しながらある図形に変わった。それはヘスティアのシンボルたる炎と、それを支える炉のシンボルだ。

これこそが神の血（イコル）によって刻まれた神の恩恵（ファルナ）だ。下界に済む者達に与えられる神からの贈り物であり、オラリオにおいてはダンジョンに入るための切符でもある。

「よし！　これで恩恵（ファルナ）は刻まれた！　これで君も晴れて神の眷属というわけさ！」

ザールはソファから立ち上がり、肩を慣らしたり腰を回したりしながら身体の具合を確かめる。

「何かが変わったような気はしないが」

「そりゃそうさ。恩恵（ファルナ）ってやつは君が戦ったり技術を磨いたりした時に得られる経験値を累積して強化されるものだからね。君の今のステイタス、恩恵の成長具合は今こんな感じさ」

ヘスティアが一枚の羊皮紙をザールに手渡す。そこには以下のようなことが書いてあった。

Ｌｖ．１
力　：０
耐　久：０

器　用…０
敏　捷…０
魔　力…０
魔法
【ライトニングボルト】
・速攻魔法
【嵐の精霊召喚】
・低級の雷の精霊を召喚する
【治癒の光】
・聖なる光が傷を癒す
スキル
【火山の民（アッシュダンマー）】
・炎への耐性
・炎による影響を５０％カットする
「最初のステイタスがオール０なのは皆同じだから気にしなくてもいいよ。それよりも、魔法をすでに三つ覚えていて、しかもスキルまである。これは近年まれに見る大当たりかも」

ムフフ、と不気味な笑みをこぼすヘスティアをよそにザールは鎧を着なおす。
「私の荷物はどこに置いておけばいい？」
「ムフフフ……え？　ああ、荷物ね。そうだな、あそこのタンスは誰も使っていないから、あれを君のロッカーにしてくれていいよ」
ヘスティアが指し示したのは安っぽいタンスだった。ニス塗りどころか表面は荒い。恐らく木材を板にしてそのままタンスの形に組み立てただけのようだ。
ザールは特に思う事もなく、荷物の中から財布と先ほどギルドで受け取った用紙を取って出口へ向かう。
「ギルドで冒険者登録をしてくる。可能ならダンジョンにも潜ってくるよ」
「ああ！　行ってらっしゃい！　あ、でも夕飯までには戻ってくるんだよ！　ベルくん、もう一人の団員に君を紹介したいからね」
ザールは「わかったよ、神様」と言って地上へ上がった。向かうのは先ほどの万神殿だ。

◆

昼間を過ぎても万神殿の中は人が多く、受付カウンターの職員たちも忙しそうにしていた。ザールは先ほどの登録カウンターに近寄り、職員に声をかけた。
「おい、そこのアンタ！」

やはり怒鳴り声に聞こえたらしく、その職員も肩をビクリと上下させた。
振り向いたその女性職員を見た時、ザールは眉をひそめた。茶髪のセミロングの髪型で、美しい容姿に眼鏡をかけている。その美貌には理由があるが、それは彼女の耳を見ればわかるだろう。尖っているのだ。
（ボズマー……いや、ハーフか）
ボズマーとはウッドエルフのことだ。最も数の多いエルフで、森のあるところならどこにでもいると言っても良いだろう。そして大体のエルフの御多分にもれず、アッシュランドのダークエルフとは険悪な仲だ。彼女はハーフのようだが、それでもアッシュランドのダークエルフを好ましいとは思わないだろう。
職員はだみ声のザールに一瞬驚いたようだったが、「んんっ！」と喉を鳴らして背筋を伸ばす。
「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」
前に来た時の職員とは違って今回の彼女は毅然とした態度で、まるで敵と戦う戦士のような印象を受ける。恐らくクレーマー対応の時の姿勢なのだろう。
ザールはそんな彼女のことなどお構いなしに、登録用紙をカウンターの上に置く。所属派閥の項目には【ヘスティア・ファミリア】と記されていた。
「冒険者登録をするため、こいつを提出しに来た。確認してくれ」

「あ、冒険者登録ですか。わかりました、お預かりします。ええと……」
　ハーフエルフの職員は受け取った用紙に目を通しながら、記されていることを読み上げる。
「ええと、お名前は【レヴァン・ザール】、種族はダークエルフ、所属はヘスティア・ファミリア……まあ！」
「どうした？」
　職員は急に声を上げた。
「あ、失礼しました。私が現在、アドバイザーを担当している冒険者の方と同じ派閥なものでしたから、すこし驚いてしまいました」
「ほう、そいつは偶然だな。私は先ほど神ヘスティアと契約を交わしたばかりだから、その同僚とはまだ顔を合わせていないんだ」
「そうでしたか。良い子なので、仲良くしてあげてくださいね」
　まだ見ぬ同僚は今の所二人の人物から好印象を持たれているらしいが、ザールにとって人づての話などどうでもよかった。
　エルフの気質と言うべきか、彼も他の種族を基本的には信用しない。アッシュランドのダークエルフはその迫害の歴史からそういった意識は特に顕著だ。加えて彼は傭兵である。自分の眼で見た者しか信用しないのである。

同僚が信用できるかどうかは同じ戦場に立った時に判断する。それが一番だろう。
「それでは、只今を持ちまして貴方を冒険者と認めます。改めまして迷宮都市オラリオへようこそ、レヴァン・ザール氏。私たちは貴方を歓迎します！」
手続きは職員の営業スマイルと共にあっさりと完了した。ようやくこれでザールはダンジョンへ入ることができる。
「申し遅れましたが、私は受付を勤めているエイナ・チュールです。どうぞお見知りおきを。それでは、引き続き冒険者として活動するための契約内容、諸注意に移らせていただき――――」
「エイナさぁあああああああああああんっ！」
ふと、その時。受付係エイナの名を呼ぶ少年の声が万神殿に響いた。
するとエイナの表情が先ほどの営業スマイルとは違った、自然なものとなる。
「あ！　先ほど言っていた貴方の同僚、ベル・クラネル氏ですよ。無事にダンジョンから戻ってこれ――――」
突然エイナの表情が石のように固まる。彼女の視線の先、つまりザールの後ろには件のベルとやらがいるのだろう。
どんな人物か確かめようと、ザールが後ろを向いたときに目に入ってきたのは、
「アイズ・ヴァレンシュタインさんの情報を教えてくださあああああああああああいっ

つ！」

「うわあああああああああっ！」

全身をどす黒い血に染めた少年がいた。

◆

エイナはザールの同僚となる少年ベル・クラネルの背を押してどこかへ行った。ザールは知らないことだが、万神殿にはダンジョンから戻ってきた冒険者が身体を洗えるようにとシャワールームが設置してあるので、そこへ連れて行ったのだろう。

「なんだ、どんな奴が仲間になるのかと思えば、まだ子供じゃないか」

ザールが百年以上を生きるエルフだということを差し引いても、ベルは若すぎる。年齢は恐らく１４か１５歳ほどだろう。その辺りの年齢が成人と言う地域や国はあるだろうが、あんな風にはしゃぐ姿はまるっきり子供のそれだった。彼からすれば、正直なところ一緒に戦場に出るには頼りなく思えた。

もしかしたら、無邪気に喜びながら敵を殺戮できる類の人物かもしれないが、それはそれで背中を預けるのが戸惑われる。

「お、お待たせしました。まったく、ベル君ったら……」

あれこれ考えている内にエイナが戻ってきたが、ザールのために急いできたのか息が切れている。特に急ぎでもなかったザールは、彼女に息を整える時間を与えた。

十秒も経たないうちに落ち着いたエイナは、改めてカウンターの後ろに回ってザールに規則と注意事項を説明し始める。

「ではまず、ダンジョンでの被害、損失に関してギルドは一切の責任を負いません。伴って、ご自身の命の保証もしかねます。やり直しなどは存在しないことを、くれぐれもご自覚ください」

傭兵として働いて来たザールにとって損害や命の危険など今更なことだ。雇い主が酷いとあえて死ぬような仕事をさせられることもあるが、よっぽど癇に障らない限りオラリオのギルドがそのようなことをすることはないだろう。

「また、度の越えた違法行為はペナルティの対象となります。それに際して冒険者の記録が抹消された場合、ギルドの一切のサポートは受けられないのは勿論、ダンジョンから持ち帰った魔石やドロップアイテムは全て強制没収となりますので、努々お忘れなきようお願いします」

「違法行為の詳細は？」

「基本的には国の法律にのっとった物ですが、その他の詳細に関してはこちらの冊子をご確認ください」

エイナがカウンターの上に置いた冊子をめくると、強盗や自衛を伴わない殺人行為の禁止の他、ランクアップ時の申請は必ずすることなど、冒険者特有のルールがあった。

「これで、規則に関してのご説明は以上です。何か質問はございますか?」
「ない」
「わかりました。最後になられますが、迷宮探索アドバイザーはおつけになられますか?」
「アドバイザー?」
「ダンジョンを探索する上で全面バックアップを務める専任の担当官をギルドの方から冒険者の方々に斡旋しています。こちらは任意です」
「費用はどれくらいだ?」
「こちらは全て無料のサービスとなっております」
　モンスターとの戦いならば、人間同士の争いごとほどではないにしろ、ザールは経験している。だがダンジョンのモンスターは地上の同種類のものに比べて強力だと聞くし、そもそもダンジョンの地形を知らないというのは戦いに臨むにあたって非常に不安になる要素だ。
　アドバイザーがいれば、どの階層にどのようなモンスターがいるか、その階層はどういった特徴があるのかという事が聞けるかもしれない。しかも無料ときた。
　アドバイザーを断る理由はなかった。
「ああ、頼む」

「わかりました。担当するアドバイザーの性別や種族にご要望はありますか?」
恐らくは冒険者と親しみやすい関係を構築するための措置なのであろうが、ザールはそんなことは気にしなかった。
「性別も種族もどうでもいい。知識に富んだものを頼む」
「承りました。明日のこの時間に、また本部にお越しください。担当アドバイザーとの顔合わせと、その他の準備がありますので」
いちいち好き嫌いで仕事の相手を選んでいれば、あっという間に破産してしまうのは目に見えている。職務内容のえり好みはある程度するが、仕事相手のえり好みは決してしないのがザールだ。お眼鏡にかなえばデイドラの取引にも乗るだろう。
これでザールの冒険者登録の手続きは全て完了した。もう誰も彼に文句を言わない。大腕を振ってダンジョンに入れるという訳だ。
「それじゃあな」
一刻も早くダンジョンに入りたかったザールはエイナに背を向けて行こうとしたが、それを彼女が「お待ちください」と引き留めた。
「もうすぐ貴方の同僚のベル・クラネル氏が戻ってくると思うので、顔合わせを兼ねてここで待っていてはどうでしょうか?」
ベルとザールを合わせたかったようだが、顔合わせは本拠地でできるからとその提案

を跳ねた。彼にはそれよりもやりたいことがあるのだ。
「もしかして、これからダンジョンに入られるのでしょうか？」
エイナの眉の両側が少し下がる。
ザールはというと、特に隠すことでもないと思ったので「そうだ」と答えた。
「冒険者になった初日にダンジョンへ入るのは、お勧めすることはできません。明日にアドバイザーの話を聞いてからでも遅くないと思います」
どうやらザールの身を案じているようだった。
エイナの言う事はもっともだが、一度ダンジョンの空気というものを味わっておきたかったザールは「ご忠告どうも」と言ってさっさと歩いていってしまう。
向かう先はバベル。先ほどは追い出されたが、今度は大丈夫のはずだ。

◆

ダンジョンの第三階層。オラリオの地下に広がる広大な迷宮は下層に行くほどに広くなり、現れるモンスターの強さも変わっていく。
現在ザールのいるこの階層は地上から近いこともあって多くの冒険者によって探索しつくされている。広さで言えば地上のバベルの直径よりは広いが、道は迷路的ながらも特段入り組んでいる訳でもなく、気を付けていれば簡単に順路は覚えられるだろう。
「いたな」

ザールが曲がり角に隠れ、覗き見る視線の先には六体の【ゴブリン】がたむろしていた。ゴブリンの背丈は人の子供ほどしかないが、ザールは警戒を怠らない。初見の相手は侮るべからずは彼の経験則だ。

ゴブリンと戦うのは初めてではないが、ここはダンジョン。あらゆるモンスターの生まれ故郷であり、ダンジョンで生まれたモンスターは地上にいる個体よりも強力だと聞く。もしかしたら、狼のように素早かったり口から火を噴いたりするかもしれない。

まずは様子見。ザールは剣を持っていない左手を曲がり角から出し、その掌をゴブリンの一体に向ける。

「ライトニングボルト」

その言葉をつぶやいた次の瞬間、ザールの掌が一瞬発光したかと思うと、空気を引き裂く爆音が鳴りゴブリンの上半身が消し飛んだ。残った下半身は、自分が死んだことに暫く気付かず、数歩歩いた後に膝をついて倒れこんだ。

ザールの魔法の一つ【ライトニングボルト】は、雷を発射して敵に攻撃する魔法だ。威力もさることながら、雷というものはつまり光の速さを持つ故、回避も困難だ。

『ギャー！　ギャギャァーーーッ！』

残りのゴブリン達はその時ようやく仲間が死んだことに気が付き、これをやった犯人を捜すように周囲を見回す。そして一匹が物陰にいるザールを見つけ、彼を指さして喚

きたてた。他のゴブリンたちがそれに反応し、彼に向かって走りだす。
ザールはすぐさま後退し、曲がり角から離れた位置に立つと左手を構えた。
『ギャギャギャッ！』
「ライトニングボルト」
ゴブリンが飛び出してきた瞬間を見計らい、再び魔法を放つ。今度は雷が貫通し、二匹同時に仕留めることができた。
『グギャギャギャーーーッ！』
魔法攻撃に倒れなかった残りの三匹が向かってくる。手にはその辺りに転がっていた石を持っていたが、非常に直線的な動きであった。
ザールは左手を下げ、右手の剣の柄を握りしめ、ゆっくりと前に進む。そして、ゴブリンが目の前に来た瞬間、その小さな胴体を二つに切り裂いた。
「モラグ・バルに呪われるがいい！」
続けざまにくる二匹。一匹は飛び上り、もう一匹は下から迫りくる。攻撃タイミングはほぼ同時で、剣を一振りするのでは仕留めきれない。
そこでザールは跳びかかってくる一匹の進行方向上に、剣を置くように構え、下から来る一匹を遠くに蹴り飛ばした。
跳びかかってきたゴブリンは、まるで自分からそうしに行ったように剣に首を捉えら

れて絶命。残る一匹は壁に叩き付けられた。

「ライトニングボルト」

その一匹は地面に落ちる前に魔法で消し飛んだ。

ザールは周辺を見回して他に敵がいないことを確かめると、剣に付着していた血液を振り落として腰の鞘に納めた。こうして、レヴァン・ザールの初めてのダンジョンでの戦闘は終わった。

「なるほど。リークリングには劣るが、地上のゴブリンよりは多少強いな」

ゴブリン達の動き、剣で斬った時の手ごたえ、それらから「ダンジョンのモンスターは地上にいる個体よりも強い」という情報は確かめることができた。

そして、ザールは手近なゴブリンの死体を短剣で解体し、その中から小さな石のような物を取りだした。すると、ゴブリンの死体が灰となって崩れた。

この石は【魔石】と呼ばれる物である。アッシュランドや一部の地域では【ソウルジェム】と呼ばれ、その中は魔力で満たされている。つまり、現代において人々の生活の一部として浸透している魔道具を動かすのに必要不可欠な燃料というわけだ。

冒険者たちはこのように、モンスターの魔石を売って収入を得ているのだ。

「なるほど、やはり地上のゴブリンのモノよりは大きいな」

小石ほどの大きさしかないが、地上のゴブリンなど砂粒程度の魔石だ。それを考えれ

ばかなりの上物だろう。
「いいぞ、やはりダンジョンで贅沢を目指すのは間違っていなかったようだな」
あらかた解体し終えたところで魔石について考えると、ゴブリンですら通常の倍以上の魔石が出た。すると、もっと強いモンスターの魔石はどれくらいの価値が付くのだろうか。
期待に胸を膨らませはしたが、今日の所は様子見が目的。それに、深入りしすぎて不意を突かれる可能性もある。ザールは、ここはぐっと我慢した。
「まあ、それでもこの程度の魔石で得られる金など、収入とは呼べないだろう」
そう結論付け、ザールは剣を握りしめ、ダンジョン内を散策するのであった。

# 3

夕方。ザールがこの街に到着してから大分時間がたち、太陽は巨大な外壁のすぐ上まで降りてきていた。

赤い夕陽が街を染め上げる。この時間帯になると薄暗がりも増えてくるので、それらをかき消すように魔石灯が点灯していき、夕方と昼の区別はなくなっていく。

夕陽に照らされた道を行くのはダンジョンから戻ってきたザールだ。腰のポーチの中には膨らんだ袋が入っており、中身は小さな魔石や魔物の身体の一部が詰まっている。オラリオの冒険者はこれを売ることで日々の収益を得ているわけだ。

今日のザールの稼ぎはどの程度になるかは知れないが、ゴブリンを５０体は倒して得た物だ。相当な収益になるに違いないと彼は踏んでいる。期待に胸は膨らむばかりだ。

ザールは万神殿に到着する。ここにはアドバイザーの受付カウンターの他に換金所がある。ここで魔石を金に換えるわけだ。

「おい！　誰かいるか!?　魔石を換金したい！」

受付係の顔が見えない箱型カウンターに向けて叫ぶと、その一部が動いて引き出しが出てきた。中は空であり、ここに魔石を入れろということだろう。ザールはポーチから

袋を取りだし、その口を開いて逆さまにする。小さな魔石がボタボタと落ち、小さな山になった。

引き出しが引っ込むと、十秒も経たない内に再び引き出しが出てきた。そこには魔石の代わりに金の入った袋が鎮座していた。

期待を込めて紐を解いたザールだったが、その表情はマスクの下で固まった。思ったよりも少ない。額にして２万３０００ヴァリス、ザールの予想では５万ヴァリスにはなっているはずだった。少なくとも、オラリオの外の街や村ならあの量でそれくらいにはなる筈だが、これでは期待の半額以下だ。

「おい、これは適正価格なのか？　ちゃんと計ったのか？　返事くらいしたらどうだ」

箱カウンターの格子に手をかけて呼びかけるが、誰もザールの声に応えなかった。換金に関するご意見、クレームは一切受け付けないということだろうか。

ザールはため息を吐く。よくよく考えてみれば、ここはオラリオ、魔石の原産地だ。輸送の手間はないし、ザールの持ってきた魔石よりも良質な物を大量に持ってくる冒険者は他にいるだろう。つまり、現状ザールに大金を払うほどの価値はないというわけだ。

金の袋をポーチに入れ、ザールは万神殿から去ろうとする。

「あ、レヴァン・ザール氏、ですよね？」

ザールが足を止めて振り向くと、声をかけてきたのはエイナだという事がわかった。彼女はザールの手にある袋を見て目を細める。

「ダンジョンに、行かれたのですね……」

「ああ。いやぁ、大金を稼げたよ」

トーンを落とし、皮肉を込めた声色で言う。一日2万ヴァリスという額は傭兵から見ても中々の稼ぎだが、オラリオの話を聞いていたザールからすれば少々期待外れであった。嫌味や皮肉の一つでも言いたくなったのだろう。

エイナはそんなザールの態度を特に注意する事はなく、彼の身体のあちこちを見ている。怪我でもないか探しているのだろう。

「明日はダンジョンに潜ることはお控えすることをお勧めします。少なくとも、担当アドバイザーとの話が終わるまでは」

「無論だとも。しばらくは様子見をしながらダンジョンに入るつもりだよ」

「なら良いのですが……どうかお気をつけて」

エイナのその言葉を聞いたザールは今度こそ万神殿を去った。

明日はもっと稼げているといいなと考えながら、ザールは廃教会へ向かう。

◆

廃教会の地下へ続く階段を降りてドアを開ける。

部屋のテーブルの上には揚げ物料理だろうか、ザールの見たことのない食べ物が置かれており、ソファに腰掛けているヘスティアともう一人がそれを頬張っていた。
「っ！　んぐ……ッ！　だ、誰ですか貴方⁉　痛っ！」
「わー！　ベルくん大丈夫かい⁉」
ヘスティアの隣にいた白髪の少年が口の中の食べ物を慌てて飲み込み、ヘスティアを庇うように立ち上がろうとする。その拍子に脛をテーブルにぶつけて床にうずくまった。
ザールはその少年を情けないと思いつつも、どこかで見たことがあると記憶を探った。そうして思い出したのは、冒険者登録をした時に現れた血まみれの少年だった。たしか、名前はベル・クラネルといったか。
見知らぬ人間が家に入ってきたことを警戒するのは当然だが、ザールの事をヘスティアは話していないのだろうか。
「ヘスティアから私の事を何も聞いていないのか？」
「いつつ……。へ？　か、神様。どういうことですか？」
ベルは脛をさすりながら顔を上げ、後ろにいるヘスティアの方を向いた。
「ほら、さっき話しただろう。彼がボクたちファミリアの新メンバー、レヴァン・ザール君だよ！」

ヘスティアがそう言うとベルは途端に笑顔になり、脛の痛みも忘れて立ち上がってザールに寄った。

「貴方が新しい団員の方ですか！　あの、僕はベル・クラネルと申します！　あの、まだ若輩者ですが、これからよろしくお願いします！」

ベルは背筋を伸ばしてお辞儀をする。

ザールは他人の礼儀など気にしないし、ベルに頼りない印象を受けていた。だがこれから同じ屋根の下、否、この場合は床の下で暮らす仲になるのだから、コミュニケーションをとらないという選択肢はないだろう。

（どれ、少し反応を探ってやるか）

ザールは兜を外して素顔を晒す。ベルの赤い瞳が丸くなった。

「傭兵、いや、元だな。元傭兵のレヴァン・ザールだ。見ての通り、アッシュランドのダークエルフだ。お前がどう思おうが知ったことではないが、これからよろしく」

ザールの自己紹介はベルの耳にはあまり入っていないように見える。恐らくダンマーを見るのは始めてなのだろう。

恐ろしいと思っているのか、醜いと思っているのか、どちらにせよベルの口から言葉が出ないのはザールの容姿のせいだろう。

「ほらほら！　そんな所で突っ立てないで！　ザール君も席について一緒にご飯を食べ

よう！」
「ああ」
　呆けているベルの横を通りすぎてザールは二人が座っていた所の向かいにあるソファに腰掛け、隣に兜を置いて謎の揚げ物料理に手をつける。
　ベルは彼の動作をただ目で追うだけだったが、ハッとなってヘスティアの隣に戻った。
「あ、す、すいません！」
　彼は何に対して謝ったのだろうか。何にせよザールは気にしないが。
　手に取った揚げ物料理に一つまみの塩をかけて口をつける。表面はサクサクとしていて、仲には温かく柔らかい物が入っていた。風味からしてジャガイモだろう。
　この食べ物はザールの舌によく合った。元々、アッシュランドの主食は芋なので相性がよかったのだろう。
「うまいなコレは。どこで買ってきた？」
「お、気に入ったのかい？　いいセンスしてるねえ。これはね、オラリオで人気沸騰中の食べ物で【ジャガ丸くん】っていうんだぜ。僕は昼にはジャガ丸くんの屋台でバイトをしているから、賄いで沢山貰えるんだよ」
「ククッ」

思わず笑いそうになるザール。
「あー！　今笑ったな！」
「ああ、神様。お行儀が悪いですよ！」
「神が……バイト……ククッ……」
髪を逆立てて抗議するヘスティアはどこへ吹く風と受け流すザール。彼の知る神の大体は死んでも定命の者の下につくことはしないだろう。だから神がバイトをするという事が少し可笑しかった。
「まったく！　オラリオの零細ファミリアは主神も働かないとやっていけないんだぞ！」
「いやぁ、すまんな。それじゃあ、これで機嫌を直しておくれよ」
そう言ってザールはポーチの中から金の入った袋を取りだし、テーブルの上に置いた。ヘスティアとベルの視線がそれに向く。
「これは？」
「今日の稼ぎだ。思ってたよりは少ないがな」
「稼ぎって……ダンジョンに入ったのかい？」
「ああ。と、言っても、今日は様子見だがな」
ヘスティアは袋の中身を改めてギョッとする。いつものベルの稼ぎより何倍も多い。

つまり腕が立つか、無茶をしたかのどちらかということだ。
「ちなみに！　どの階層まで潜ったんだい？　回答によってはお説教をしなくちゃならないよ」
「たしか第三階層だったかな。ゴブリンやコボルトばかりで張り合いはなかったがな」
「三階層か……うーん、微妙なところだけどなぁ……」
そう言いながらザールはジャガ丸くんを頬張る。楽に金を稼げるならばそれに越したことはないが、ザールも戦士の端くれ。戦いには多少なりともやりがいを求めるタイプの人種だ。
ふと、ザールはベルが目を輝かせて彼を見ていることに気が付いた。
「……なんだ」
「す、凄いですよ！　僕なんて、ついこの間冒険者になったばかりの頃はゴブリンを倒すのもやっとって感じだったのに、いきなり三階層だなんて！」
現在、ベルの強さがどの程度なのかは知らないが、少なくともゴブリンを倒した程度で凄いと言う者を頼りにしようとは思わなくなった。
「あ、あの、ザールさん！　もし良かったら、僕とパーティを組んでくれませんか？」
その申し出に対してザールは断りを入れようとしたが、その前にヘスティアが口を開いた。

「曲がりなりにも、ベル君はダンジョン探索においては君より（一週間くらいは）先輩なんだぜ？　ダンジョン探索するなら、多少は知識がある人がお供にいると便利だと思うけどなぁ」

ヘスティアの言うことも最もだが、ベルはどう見ても戦いを生業とする人種には見えない。神の恩恵を受けているので見た目で強さは測れないが、ザールより強いということはないだろう。

だが、下手に断って同居人どうしの関係が気まずくなるのも気が引けたのでとりあえず首は縦に振ることにした。

「よかった！　じゃあ明日からの探索は君もベルくんに同行してくれたまえ！」

「いや、それは無理だ」

ヘスティアがステーンとひっくり返る。

「な、なんでだよ！　さっき首を縦に振ったじゃないか！」

「明日の昼はアドバイザーとの面談があるのでな。どのくらい時間が掛かるかはしらんが、同行は無理だよ」

「そ、それなら仕方がないな」

すごすごと引き下がるヘスティア。すでに予定がある人物に強要はできない。だがザールとベルが組めば今よりももっとダンジョンの攻略が進むだろう。ベルには明日

はいつも通りに一人でダンジョンに行ってもらう他はあるまい。
皿の上のジャガ丸くんは全てなくなり、今日のヘスティア・ファミリアの夕食が終わった。
ジャンクフードしかなかったことは多少不満だったが、ザールはジャガ丸くんのことは大いに気に入った。何時か故郷の穀物であるアッシュヤムで同じ物を作ってみようかと考えるくらいだ。
「よし！　じゃあ新メンバーも加わったことだし、僕たちの未来のためにステイタスを更新しよう！」
ヘスティアが立ち上がってそう言った。

◆

レヴァン・ザール
Ｌｖ．１
力　：０→７
耐　久：０
器　用：０→１１
敏　捷：０→９
魔　力：０→１７

魔法
【ライトニングボルト】
・速攻魔法
【嵐の精霊召喚】
・低級の雷の精霊を召喚する
【治癒の光】
・聖なる光が傷を癒す
スキル
【火山の民アッシュダンマー】
・炎への耐性
・炎による影響を５０％カットする

「やはりゴブリン風情、幾ら倒したところでこんなものか」
普段着に着替え、渡された紙を眺めながらザールは愚痴るようにつぶやく。ステイタスは低いうちなら早く成長するという。自分のステイタスの伸び方が良いのか悪いのかはわからないが、彼としては殆ど成長していないように感じた。
「いやあ、最初にしてはかなり成長している方だと思うよ？　でも耐久が全く上がって

いないってことは、あまり攻撃は食らわなかったってことかい？」
「ゴブリンなどでは何匹いても私にかすり傷すら負わせられんよ」
　ザールの場合、頭に袋を被せられて後ろ手に縛られているなんてことにでもならない限り、ゴブリンの攻撃に当たることはないだろう。
「そうやって油断していると足をすくわれるって話だよ」
「ハイハイ。まあ、気を引き締めなくてはならない一線は心得ているさ」
　腕利きとはいえ、ザールは「自分が最強だ」などと自負するほど傲慢ではない。過去に命を落としそうになった事は何度もあった。ミノタウロス十頭を相手にした時は腹を破かれたし、ドワーフの古代遺跡に入った時は、古代ドワーフの作り上げた自動人形たちに矢の雨を浴びせられた。ドラゴンと戦ったこともあるくらいだ。奴らの炎は火に耐性のある筈のダンマーの皮膚でさえ焦がすほどだった。
　つまりそれ位でなければザールを危機に陥れることは不可能だという事だ。無論、それ位になったら気を引き締めなくてはならないが。
「私の寝床はどこだ？」
「あー、まだベル君の分のベッドも用意できていないんだ。だからあの子と一緒にリビングのソファで寝ておくれよ」
「わかった」

リビングに向かうザール。それと交替するようにベルがステイタスの更新のため、ヘスティアの寝室へ入っていった。

「あんな小僧がダンジョンに潜るか……」

ザールとしては、ベルは戦場に出られるような人間には見えなかった。どちらかと言えば、平穏な田舎の村でクワを振るうか、家畜の世話をするかして穏やかな一生を過ごすのが似合いの少年。戦いには向いていない。

ダンジョンに潜っているという事は、それなりに力はついているのだろうが、それを考慮しても不安は払拭しきれない。

（まあ、私の足さえ引っ張らなければ良いがな）

ザールはソファの片方に身を投げ出し、右半身を下に向けて瞼を閉じた。

オラリオに来て初めての眠り。ダンマーはどのような夢を見るのだろうか。

# 4

ザールがオラリオに到着した翌日。現在の時刻は午後1時頃。彼は万神殿に来ていた。理由は担当アドバイザーとの面談だ。

到着して用件を伝えると、ザールはすぐに個室に移動させられ、そこでしばらく待つようにと言われた。

狭くはないが広くもない。4，5人で面談できるには丁度いい程度の部屋で、ザールは出された茶を飲みながらアドバイザーはいつ来るのだろうかと考えていた。

その時、部屋のドアがノックされる。

「失礼します」

そう言って入ってきた人物に、ザールは見覚えがあった。セミロングの茶髪に眼鏡をかけたハーフボズマーの女性、エイナだ。

「本日から貴方のアドバイザーを務めることになりました、エイナ・チュールです。よろしくお願いします」

「ああ、お前か」

「はい。ベル・クラネル氏と同じファミリアの所属との事でしたので、まとめて担当した

方が良いとされました」
　そう言うとエイナはザールの向かいの席に腰掛けた。
「では、これから打ち合わせを進めていきたいと思いますが、その前にザール氏。これは提案なのですが、話し方を少々砕けさせてもらってもよろしいでしょうか？」
　業務上、パートナーとなる相手との円滑な関係を構築するため、互いの壁をある程度取り払おうという計らいだろう。
「ああ、構わんが」
「ありがとうございます。これから二人三脚をしていくことになりますから、気軽で良好な関係を作っていきたかったので」
「気軽で良好なのは良いが、私の要望は知識に富んだ者だ。その点、お前は問題ないんだろうな？」
　歯に着せぬ言い方をするザール。すると、エイナがムッとした表情になる。
「ザールさん、そういう言い方は良くないですよ。これは業務の一環であると同時に、コミュニケーションでもあります。それを疎かにしてはいけませんよ」
「……あ、ああ。悪かったよ」
　ザールはバツの悪そうに頬を軽く掻く。今まで他者に対する礼儀など、よっぽどの名家の者に対するモノ以外は考えたこともなかったので、これは少し面倒な人種に当った

と考えていた。
「それで、知識の面でしたらご心配はなく。ダンジョンの上層から下層までの地形、特性、出現するモンスター等の知識で、記録に残っている物でしたら全て記憶していますから」
「そいつは期待できるな」
　エリナの言葉の真偽はザールの知るところではない。彼女を信用している訳ではないし、これからも完全に信用するつもりもなかった。信用するつもりはないと言っても、全ての言葉を疑ってかかるわけではない。聞かされた言葉の真偽を十全に精査するという意味だ。
「それじゃあ、これが支給品のライトアーマーとナイフです。でも、ザールさんはもうキッチリと装備を整えているみたいですし、これらは必要ないですか？」
　テーブルの上に乗せられたのは戦闘用ナイフと軽装鎧。ナイフは既に自前の物があるし、軽装鎧の方は服の上から当てる鋼板でそれなりには頑丈そうだったが、ザールの着ている鎧より性能が良いということはないだろう。
　両方とも、貰う意味がない。
「ああ、コレはいらん」
「わかりました。じゃあ、これは下げますね」

エイナは支給品装備を下げて、自分の隣の席に置いた。
「それじゃあ、次はダンジョンについて勉強をしてもらおうと思います。ザールさんは昨日、アドバイザーも決まっていないのにダンジョンに行ってしまうんですから、これからはこういった前情報はきっちりと覚えてもらいますよ。言っておきますけど、これは強制ですよ？」
「様子見に行っただけと言っただろう。だが、もう知識の教授か。良いな」
元傭兵としては戦場の前情報はしっかりと入手しておきたい。それも、早ければ早いほどいい。仕事が近い場合は特に。
ふと、エイナの表情が明るくなった。
「良いですよね！　必要ですよね！　近頃の冒険者になりたいっていう人は、勉強って言葉を聞いた途端に嫌な顔をする人ばかりなんですよ！　ザールさん！　そう言ってもらえると、私も張り切って取り組めますよ！」
「そ、そうか。そいつは何よりだ」
「ええ！　それでは！」
ドカン！
家の解体に使われるような大木槌を思い切り叩きつけたような音がテーブルから発せられたが、エイナがまさか突然木槌を持ちだして殴りつけたわけではない。

音の正体は本だった。だが、それは本というにはあまりにも大きすぎた。大きく、分厚く、重く、そして丁寧に装丁されていた。それはまさに辞典だった。それが六冊もあった。

「今日の所は手始めにこの六冊の大辞典を全部覚えて帰りましょう！」

「な、何ぃ……!?」

ザールは後で聞いたことだが、エイナは指導者となれば、古代スパルタ張に厳しい鬼教官に変身し、冒険者に徹底的に知識を叩きこむことで有名だったらしい。

その時点で心を折られた者達は、その指導を畏敬の念を込めて【妖精の試練】と呼んだそうだ。

◆

「全く！　何だあの鬼のような女は！」

結局、あの後ザールは数時間にも及ぶエイナの勉強会に付き合わされ、外に出る頃にはすっかり夜になっていた。だがザールは大分早く解放された方だ。ある新人冒険者は昼から始め、日付が変わっても終わらず、太陽がオラリオの外壁から顔を出すまで付き合わされたらしい。

六冊の大辞典の内容はダンジョンの階層別の解説と出現モンスター、モンスターの絵姿と特徴などだ。これを暗記させられた後に問題が出され、それの正解率が目標まで届

かない場合は何度でもやり直しをさせられるという勉強法だ。
幸いなことにザールはモンスターに関する知識は長い傭兵人生の中で豊富に蓄積されていたので、後は自分の知識をダンジョンの知識で補填すれば良かった。
（ボズマーは変人が多いが、あれほど凶暴なのは見たことがない）
問題を間違えると一から全て覚え直しをさせられる。それも怒鳴ったりいびったりせず、冷たい口調で淡々とやり直しを命じられるのだ。無駄のない指導法だがそれ故に心臓にクる物があった。
（今日一日、一回も剣を振っていないのに酷く疲れた。酒でも飲むか）
勉強会が終わり、本拠地に戻ろうとした時、ある職員がザール宛の言伝を言ってきた。なんでも、ベルがザールの加入を祝うために【豊穣の女主人亭】という酒場で夕食を取ろうと誘って来たそうだ。場所は西のメインストリートに面した所にあり、すぐに見つかるとの事だ。
ベルは頼りにならなさそうな人物だとザールは評しているが、酒が飲めるとなれば話は別だ。飲みの席では無礼講、ザールがどう思っていようがその瞬間だけ、席を共にする全ての人物は友達だ。
「おっと、ここか」
本拠地への帰り道の途中にその店はあった。

【豊穣の女主人亭】。夜は仕事を終えた冒険者や労働者たちの休息の時間であり、彼等は一日の疲れを吹き飛ばすための酒場に立ち寄る。周囲には他の酒場もあるが、この店はそれらのどこよりも賑わっていて、笑い声や怒号が外にまで声が響いていた。

（ほう、良さそうな店じゃあないか）

ザールは入り口の前で絡み合っている金髪の少女と、酔っているのか顔がその赤髪くらい赤くなった神の脇を通り抜けて入店する。その彼の所へ、侍女（メイド）が纏うような給仕服を着たボズマーの店員が近寄ってくる。

「いらっしゃいませ。御一人でしょうか？」

接客だというのにニコリともしない、何とも愛想のない店員だったが気位の高いエルフが給仕なんてやっている時点で珍しいのでザールはそこまで気にしなかった。

「いや、待ち合わせだ。もう来ているはずなんだが……」

店員から目を離して店内を見回す。

今日の成果を喜び合うヒューマンたち、ジョッキを打ち付けるドワーフたち、大きな骨付き肉にかぶりつく獣人、悪そうな顔でポーカーを楽しむエルフ、酒の席に便乗して男にすり寄るアマゾネス、宙吊りにされて喚いている狼人（ウェアウルフ）など、様々な種族が老若男女を問わずこの店で楽しんでいるが、その中に白髪の少年の姿はなかった。

ベルの髪色はよく目立つので見逃すという事はないだろうが、見当たらないとなると

まだ店に来ていないのだろうか。

「差し支えなければ待ち人の特徴を教えていただけますか？　二階にいるかもしれません」

店員の言葉を聞いたザールがもう少し目を凝らして見ると、カウンターの上に吹き抜けの二階があった。ここにいないとなると、そこにいるかもしれない。

「ああ、そうだな。そいつは白い髪に赤い瞳をした、ヒューマンの子供なんだが……」

そう、ザールが告げた途端、店員の目が細められた。それはまるでザールを悪人だと言わんばかりであり、彼を非難しているようだった。

「ほ～う？　お客さ～ん、あの食い逃げ小僧の仲間かニャ～？」

突然後ろからかけられた声に驚いたザールが振り向くと、そこには何時の間にか黒髪の猫人（キャットピープル）の店員いた。如何に猫人が隠密に長けた種族とはいえ、ここまで接近されるまで気付かなかったことにザールは驚いたが、それよりもっと問題にするべき言葉が聞こえた。

「食い逃げだと？何の話だ？」

「確保オーッ！」

「うわっ！」

第四の叫び声が発せられたかと思えば、ザールは両脇をガッチリとホールドされてい

た。片方は黒髪の猫人、もう片方は別の猫人の店員だ。振りほどこうにも、信じられない程強い力で抑えられているため、それは叶わない。まるでミノタウロスに抑え込まれていると錯覚するほどで、酒場の給仕なんてやっている細身の女性の力とは思えない。

「おら！　キリキリ歩くニャ！」

「な、何をする！　放せ！」

連行されたのはカウンター席の前。そこには飲みかけのジョッキと、食べかけの麺料理と魚料理があり、その向こうには長身のザールですら見上げなければならない程、身体の大きなドワーフの女性が腰に手を当てて待ち構えていた。

「ほう、アンタはアイツの仲間って訳かい。あたしゃ、この店の店長やってる者（モン）だよ」

そう言う女店長から感じる圧は、ザールの長い人生の中でも稀な程であり、彼は過去に戦った雪原の巨人を思い出した。剣や魔法の腕だけでは足りず、ありったけの手持ちの道具を用い、環境も利用して辛くも勝利を収めた。その時は身体中の骨が何本も折れ、内臓もいくつかダメになったほどだった。運よく手に入れたエリクサーがなければ、彼は傭兵稼業をそこでやめていただろう。

つまり、それ位の力をこの女店長からは感じる。他の店員からも店長ほどではないが、強力な圧を感じる。下手に逆らわないほうが良いだろう。

ボズマーの店員が席の一つを引き、そこに猫人たちがザールを乱暴に座らせる。

「な、何だってこんな扱いを受けなくてはならないんだ!?」
「そりゃアンタが食い逃げ犯の仲間って聞いたらね、客として扱うわけにはいかないよ」
横暴だと言いたかったザールはグッと言葉を飲み込んだ。抗議したところでこの店の化け物染みた圧を持つ店長と店員に袋叩きにされそうだし、同じ派閥に所属している者の不始末は被害者からすれば連帯責任を取ってもらう他はない。
「クソッ！　あの餓鬼め……ッ！　幾らだ!?」
「１３５０ヴァリスだよ」
ザールはポーチから財布を取り出して金を払う。酒場で夕食という事でいつもより多く出費はあるだろうと考えていたが、まさか別人の分を自分の歓迎会で払うとは思ってもみなかった。
この分は本拠地に戻った時、きっちりとベルに支払わせようと、ザールは硬く決意する。例え彼を殴り倒すことになってもだ。
「んで？　どうする？　あの小僧の食べかけでいいならソレを食って行ってもいいけど？」
「人の食いかけなんぞいるか！　他のをよこせ！　ああ、それは包んでおいてくれ。明日あのガキに食わせる」
確か本拠地には冷蔵庫があったはずなので、翌日までくらいになら保存は効くだろ

う。
　ザールは兜を脱いでカウンターに叩き付けると、踏ん反りかえるように座りなおして店員を睨むが、彼女たちは金を払ったザールに興味が無くなったようでそれぞれの職務へ戻っていった。ベルの食べ残しは、後からきた銀髪のヒューマンの店員が厨房へ持って行った。
「あん？　アッシュランドのダークエルフとは珍しいね」
「ダンマーと呼べ」
　店の壁を見ると、そこには様々な食べ物や酒の名前が所せましと書き連ねられていた。メニューは豊富なようだが、そうなると今度は選ぶのが大変になってくる。
　エイナとの勉強会で疲れたので、何か精のつく物でも食べようかと選んでいる時、ザールの目にある商品名が映った。それを見たザールは今までの留飲を忘れ、女店長の方を見た。
「スジャンマがあるのか？」
「ははん。アッシュランドのダークエルフ、じゃなくてダンマーのアンタならそれにすると思っていたよ。ああ、あるとも」
「それをくれ！」
　食い気味に注文するザール。女店長は笑いながらカウンターの下から酒瓶と、グラス

を取り出す。まるで虫の蛹か卵のような見た目をした陶器の瓶は、アッシュランドの特産酒であるスジャンマを表している。

スジャンマとは、アッシュランドの固有種の芋である【アッシュヤム】を使った蒸留酒に、アッシュランド固有の植物を幾らか混ぜた混合酒だ。飲むとまるで自分が火山になったかのように身体の内側が熱くなり、非常に元気になる。また、酒気が強く、他の酒より長く酔っていられる。ダンマーたちに愛されている穀物から作られた、愛された酒だ。

この店では一杯８５０ヴァリスと、他の酒よりも値段が高いが、これはボッタクリという訳ではなく、アッシュランド以外でこの酒は流通していないので手に入りにくいというだけの話だ。むしろ、８５０ヴァリスというのは安いくらいだ。

「ああ、故郷よ……」

女店主がグラスの口ぎりぎりに注いだスジャンマを、ザールは「おっとっと」と慎重に口につけて一口飲む。

間違いなく故郷の味だ。巨大なキノコの森林と、巨大な虫、灰の荒野。７０年近く帰っていない故郷だったが、このスジャンマのおかげでハッキリと思い起こすことができた。

「つまみはいるかい？」

「ああ。それじゃあ、ベルグポテトと鹿肉のシチュー、それと鮭のステーキをくれ」
「あいよ！」
適当に腹を満たせそうな物を注文し、ザールはスジャンマに集中する。
スジャンマという酒は混合酒故、ブレンドに違いがあるため地域や家によって味は異なってくる。今、飲んでいるこれはアッシュランドの首都がある本土ではなく、大陸の地域の北西側の趣が強い気がした。隣国が冬国であるためだろうか、僅かながらベリーの風味もある。これを飲んでいれば雪原でも指が悴んだりはしなさそうだ。
「……あの、少しいいですか？」
酒を楽しんでいるザールに声をかける者がいた。楽しみを中断させられた彼は、少し鬱陶し気にその人物を見る。
少女だった。落ち着いていそうな表情のため大人っぽく見えるが、どちらかというと女性になり始めていると言った印象がある。
女性として完璧に近いプロポーションを浮き出すような、身体に張り付く白い薄手の服に身を包んでいるが、決して娼婦のような下品さはなく、むしろ上品に見えるくらいだ。
長いブロンドの髪は金糸のようだが、同時にシルクのようにしなやかだ。
（何だこの小娘は？　どこかで会ったか？）

何となく見覚えがあるなと思ったが、酒の入ったザールは思い出すのに少々苦労していた。少しの間、うんうん唸ってようやく思い出した。
「ああ、来た時店の入り口の所にいたな」
「……あれは、忘れてください」
そう言って少女はザールの隣の席に腰掛けた。他種族がまさか初対面のダンマーに気があるという事は滅多にないのでその線は期待していないが、そうなるとザールに何の用があるというのだろうか。
「……あの、盗み聞きするつもりはなかったのですけど、白髪のあの子の知り合い、だとか」
「ああ？　あのガキのことか？」
食い逃げした上、その代金を支払わされた事を思い出したザールは眉間に眉を寄せ、その事を忘れたいと言わんばかりに酒に口をつける。
「もしかしたら、あの子が出て行ったのは、私たちのせい、かもしれません」
「何？　どういう事だ」
口数の少ない少女はぽつり、ぽつり、と、ベルが食い逃げをする前の事を話し始めた。
なんでも、昨日ベルは少女のファミリアが捕り逃したミノタウロスに襲われ、それを彼女が助けたらしい。その時、ベルはミノタウロスの血を浴びて真っ赤になってしまっ

たという。ザールが昨日見たベルの姿はそれが原因だった。
　その無様な姿を、まさか本人が同じ酒場に来ているとは知らず、少女の仲間が酒の席で笑い物にし、侮辱してしまった。そのせいでベルは出て行ってしまったのではないかと言う。
「なるほどな。気持ちはわからんでもないが、まあ、私は概ねお前の仲間とやらと同意見だよ」
「……どうしてですか?」
　少女の言葉には悲しみと、少々の怒気が含まれているように感じた。
　少女とベルがどういう関係なのかはザールの知るところではないが、彼は自分の意見を曲げるつもりはなかった。
「あの小僧とは会って一日しか経っていないが、どうもアレは戦場に夢を見ているガキにしか見えんよ。それも、戦うのに向いていない類の人種にもかかわらず、だ」
「……」
「他者を笑いものにする輩は感心せんが、まあ、そのおかげで小僧の目も覚めただろう」
　そう言いながらザールは運ばれたつまみに手を付ける。辛気臭い話になって酒の味は落ちたが、つまみで何とか持ち直しを測るつもりだ。
　ベルは今頃、何をしているだろうか。ザールの見立てでは、本拠地の寝床で泣き寝入

りをしている事になっている。
「まあ、ヤツが何を思おうと知ったことではないがな。次に会ったらそれとなく慰めてみるさ」
ベルに対して仲間意識はないが、子供が泣いているのを黙って見過ごすのは寝覚めが悪いような気がした。ザールのそれは完全にただの同情心。それでベルが冒険者を続けるのも、あるいは止めて田舎に戻るのも、どっちでもよかった。どう転んだところでザールの邪魔にはならないだろうから。
「……貴方は――――」
「あああああああああああっ！　ア、ア、ア、アイズたあああぁぁぁぁん！」
少女が何かを言いかけたその時、彼女の言葉を遮り、この真面目な空気をぶち壊すような声が発せられたかと思うと、ザールと少女との間に赤髪の女性が割り込んできた。
「うわ！　何だコイツ!?」
「そりゃこっちの台詞じゃい！　何、ウチの可愛いアイズたんにコナかけとんねん！」
フシャーッ！　と、まるで蛇のように威嚇をしてくるのは、先ほど少女と店の入り口の前で絡み合っていた神だった。中性的な顔立ちをしているが、身体の凹凸が乏しいためザールは性別を測りかねていたが、声からして恐らく女神だろう。
「……うるさい」

「うぎゃ！　痛いでアイズたぁ～ん」
と、アイズがイラっときたのか、その女神の頭にゲンコツを落とした。赤髪の間から団子のようなタンコブが膨らんでくる。
神がバイトをしているだけでも冗談のような光景なのに、主神に対して暴力を振るうというのはザールにとって信じがたい行為だった。流石はオラリオと言ったところか。
「ふぇ～ん……ん？　クンクン」
嘘っぽく泣いている女神は突然ピタリと止まり、犬のように鼻をならしてザールの方を見る。いや、正確には彼の持っている酒だ。
「なんや自分、珍しい酒飲んでるな。この臭いは芋？　でも、ちょっと違うような……」
ザールの酒に関して、あれこれ呟き始める女神。何か嫌な予感がしたザールは自身のグラスを手で隠す。流石に人のグラスに入っている酒を取ったりはしないだろうが、この女神からはクラヴィカス・ヴァイルのように油断ならないモノを感じた。
「よし！　ミア母ちゃん！　このダンマーが飲んでるのと同じヤツ頂戴！」
「あいよ。一杯かい？」
すると、女神がザールの方を見て、ニィーっと嫌な笑みを浮かべた。
「一瓶全部！」
「あいよ」

「あ！　こら！　ふざけるな！　ソイツは私のだ！」
　思わずカウンターの上の酒瓶に飛びつこうとするザールだったが、女神は信じられないほどの素早さで酒瓶を掠めとると、ジョッキやグラスに注がずそのまま口をつけた。
「ごくごく……ぷっはぁー！　美味い！　なんやこれ、ごっつ美味ない!?　こんな良い酒隠しているなんて、ミア母ちゃんも人が悪いわぁ～」
「隠しちゃいないよ。店の壁に札がかかっているだろ。あの端」
「う～ん、どれどれ～？　スジャンマ。ああ、なるほど、なるほど。ダンマーの自分が欲しがっていたわけやな」
　女神は人をイライラさせる笑みを浮かべ、まるでボールのように酒瓶の底を指で回す。アイズは呆れたといった顔になり、ザールに「ごめんなさい」と一言告げた。
　文句を言いたかったザールだが、すでに酒の所有権は女神に渡っており、強引に奪い取れば彼は犯罪者になってしまう。ここは大人しくして、グラスの中の半分くらい残ったスジャンマで我慢する他はないだろう。
「んん～。アイズたんナンパしてたのは気に入らんけど、良い酒を見つけられたのはアンタのおかげって考えれば、恩赦しなくちゃならんかな」
　そう言いながら女神は酒瓶の口をザールに向ける。怪訝そうな顔をするザールだったが、もっとスジャンマが飲みたかったのでグラスを差し出した。すると女神は酒瓶を

傾け、グラスの中に酒を注ぐ。
「ほれほれ。もっと嬉しそうな顔せんかい。オラリオ屈指のファミリアの主神様に酌してもらうなんて、滅多にあることじゃあらんで～」
「……後で金払えなんて言われても私は知らんぞ」
「んな硬いことは言わない！　飲もう！」
女神は酒瓶を掲げる。乾杯しろということだろうか。ザールは渋々それに応え、グラスを軽く酒瓶に当てて酒を煽る。
「うんうん！　良い飲みっぷり！　いよ！　大統領！」
意味の分からない音頭だったが、悪い気はしなかった。
今日は色々と疲れることはあったが、その分、まあ、楽しいこともあったのでそれで帳消しにしようと、ザールは一人ごちるのであった。

# 5

「ほなザールクン！　またな～！」

深夜を過ぎて二時間は経った頃、アイズと彼女の主神たちの宴が終わった時にザールも店を出た。別れ際、互いに手を振ってさよならをする。

女神はロキと言い、彼女の派閥はこのオラリオでは屈指の規模を誇るらしい。そういった所とコネができたのは幸運だろう。

「また今度！　……っとと、少し、飲みすぎたか」

最初の一杯以外がロキの奢りだったので大して出費はしていないが、彼女に乗せられてついスジャンマを飲みすぎてしまった。兜は腰ベルトに吊り下げているためザールの顔は晒されているが、灰色の肌に赤みが掛かっている。足は右へふらふら、左へふらふら、まさに千鳥足だ。手に持った残り物の包みが時計の振り子のように揺れる。

ふと、雨が降り始めた。金の月を隠すように雨雲が現れ、大量の水滴を地上に振らせる。ザールはこれはいけないと、急ぎ足に拠点へと向かう。

（美味いスジャンマだったが、次の入荷は一週間後か……暫く飲めないのは辛いな）

オラリオにおいてスジャンマは知名度が低いため、あまり市場に出回らない。【豊穣

の女主人亭】にあったのは幸運だったが、他の店を探しても中々見つからないだろう。大人しく来週まで我慢する他はない。

「う～ん、あの小僧め、絶対に金、払わせてやるぞぉ」

ベルに対する文句を言いながら帰路につき、ザールは本拠地に戻ってきた。地下への階段を下り、少し乱暴に扉を開ける。

「うひゃあ!」

「おーい!　小僧!　いるか!?」

大きな音と怒鳴り声に驚いたヘスティアが飛び上った。どうやらまだ起きていたようだ。

「お、お、お、ザールくん!　もうちょっと静かに帰ってきたまえよ!　心臓に悪いだろう!?」

「うるさーい!　私はなぁ、あの小僧に文句があるんだぁ!」

そう言ってザールは残り物の包みをテーブルの上に置いて部屋を見回し、ベルがいない事を確認すると部屋中を探し回った。クローゼットの中、テーブルの下、ゴミ箱の中。どこを覗いてもベルはいなかった。

そうして別の部屋を探そうとした時だった。

「え、ちょっと、ベルくんは一緒じゃないのかい?」

ヘスティアがザールにそう言った。
ザールは一瞬酔いが覚めてヘスティアの方を向く。
「なんだと？　先に帰っているんじゃなかったのか？」
「い、いや、まだ帰っていないけど……」
不穏な空気が漂い始める。
「ヤツは私に支払いを押しつけて店から出て行った。戻る所など、ここしかないだろ」
「え、ベルくんそんな事したのか？　いやいやいや、今はそんな事どうでもよくって、ベルくんはどこへ行ったんだ？」
この広いオラリオであってもベルが戻れる場所はこの廃教会だけだ。宿泊施設は多くあるため、泣き顔をヘスティアやザールに見られたくないというのならばそこに飛び込んでいるという可能性もある。あるいは、その辺りの路地裏でうずくまっているか。
だが、他に一つだけ可能性がある。それはベルが冒険者ならば、そこへ行くには十分に可能性のある場所だ。
「悪いがまた出かけてくる！」
「あ、どこへ行くんだい!?」
ザールは放り出した剣と兜をまた取り、部屋の出口に行く。
「ヤツが何もせず泣きはらすようなガキではなく、男になり始めているとしたら、考えら

れる場所は一つだ！」
向かう場所はダンジョンだ。
地上へ上がり、廃教会から飛び出し、歩いて来た道をまた戻り、空にそびえる白亜の摩天楼へと向かう。街は未だに灯りに包まれ、雨音に混じって笑い声が響いている。降りしきる雨粒の間を縫ってザールは走った。
途中、バベルへ至る道の上にある広場の噴水で顔を洗って酔いを冷まし、人気のなくなったバベルへ飛び込み、穴の中へ続く階段を駆け下り、ずぶ濡れのままダンジョンに入る。
『ギギギィーッ！』
「邪魔だ！」
大して広くもない第一階層、ゴブリンを蹴散らしながらザールは進む。数分間走り回り、彼の他に戦っている者の気配はなく、この階層には誰もないという事が分かるとザールはすぐさま下の階層へと降りた。
第二階層、第三階層。どこにもベルの気配はなかった。四階層にまで降りて探し回った所で自分のアテが外れたのかと思ったが、ザールは更に下の階層に続く階段の前で、それを見つけた。
「足跡……」

それは誰かの足跡だった。まだ新しく、一時間か二時間以内に誰かがこの階段を下ったという事がわかる。

ザールはしゃがみ込んでその足跡を注意深く観察する。

（大きさからして、低年齢の子供や小人族の物ではないが、成人男性やドワーフの物でもない。靴底の特徴から女物ではなく男物。１４から１６歳ほどの男性の物だ。乱暴に踏み抜かれている事、つま先部分がより深く踏み込まれている事から、この足跡の主は感情に任せて走っている）

「間違いない、あの小僧は更に下に向かった」

残された痕跡からベルの存在をダンジョンに確認したザールは、すぐさま階層を下った。

第五階層。ベルはここでロキ・ファミリアが討ち損じたミノタウロスに襲われたらしいが、今の所彼の姿は確認できていない。

ザールは走りながら、何故自分はベルを助けようとしているのかと自問自答をし始めていた。二日前に会ったばかりの、大して信用もしていない少年。一緒に戦場に出ることを嫌がっていたような相手を何故助けようとするのか。

その答えは暫くわかることはないだろうが、思考をループさせる事でザールは精神を集中させていた。

「ん？」

大型犬ほどの大きさがある一つ目のカエル【フロッグシューター】の舌を、内臓ごと引っ張り出した所でザールはダンジョン中に散らばっているモンスターの死体を見つけた。

すでに絶命したフロッグシューターの舌を放り出して死体を観察する。

（この切り傷は……そこそこの品質のナイフかダガーか）

ザールは記憶を手繰り寄せてベルの姿を思い出す。確か彼は目に付くような武器は持っていなかったが、腰ベルトにダガーを納刀していたはずだ。やはりベルはここにいる、あるいは来たようだ。

モンスターの死体をたどって行くと、所々に布の切れ端があるのを見つけた。モンスターは服を着ないので恐らくベルの物だろう。

（この辺りの階層からモンスターが強くなっていき、負傷しはじめているな）

ベルの身を案じて急ぎ足になり、第六階層へ下る階段の前に来た時。遠くの方から、音が聞こえる。

それは獣の遠吠え、ないし人間の叫び声のように聞こえた。

「小僧！　そこにいるか！」

叫びながら階段を下り、声のする方へと走るザール。聞こえてくる音は鮮明になって

いき、それが雄叫びだということが分かり始めてきたころ、ナイフが肉を切り裂き、骨を砕く音も聞こえ始めていた。

「うおおおおおおおおおおおおー」

ベルがいたが、その恰好はダンジョンに挑むには自殺行為としか言いようがない。纏っている服はレザー製ですらない普段着で、防御力など期待できるはずもない。更に酒場から飛び出してきたために回復アイテムなど持っていたはずもない。武器はちっぽけなナイフが一本のみ。更には複数のモンスターに囲まれている。俗に言う【怪物の宴（モンスター・パーティー）】に遭遇している状態だ。

そんな状態のベルが主に相手をしているのは、遠目から見れば人間に見えるモンスター。人型のシルエットだが、夜みたいに真っ黒な身体に、丸い鏡のようになっている顔は生命という物を感じさせない。

【ウォーシャドー】。初心者冒険者の最初の壁と言われる強力なモンスターだ。冒険者になりたてですぐに死んだのならば、原因はコイツというくらいには厄介な敵でもある。

その理由は、膝下くらいまでありそうな長い手にある。下手な槍よりも長いリーチと、指先にあるナイフのように鋭い三本の鉤爪。

この階層に至るまでの敵はゴブリン、コボルト、フロッグシューターだが、彼等は武

器らしい武器を持っておらず、爪も牙も並の獣程度で、フロッグシューターの舌に至っては打撃力はあるものの耐えがたい程ではない。
つまり、ウォーシャドーは初めて出てくる凶器を持ったモンスターという訳だ。
「あぐぅ！」
ウォーシャドーの鉤爪がベルの肩を切り裂く。パックリと割れた傷口から血が噴き出す。
「こんのぉ！」
だが興奮状態で痛みを感じていないのか、ベルは傷に構うことなくウォーシャドーの顔面にナイフを突き立てた。鏡のような頭部にひびが入り、そのウォーシャドーは動かなくなるが、同時にナイフが抜けなくなっていた。
その隙を見逃さず、ベルを囲んでいたモンスターたちが彼に一斉攻撃を仕掛ける。
「ライトニングボルト！」
危険を感じたザールは左手を構えて雷を放ち、ベルに跳びかかっていた三体のモンスターを吹き飛ばした。
「シェオゴラスの狂気に呑まれるがいい！」
剣の柄を握りしめ、ザールはモンスターの群に飛び込んだ。その戦いぶりは嵐のようで、雷と斬撃が回転してモンスターたちを切り裂き、貫いた。

「え……？　ぐぇっ」

そして隙を見たザールはベルの首根っこを掴むと、急いでその場から離脱する。

走りながら左肩にベルを担ぎ直し、道を遮るモンスターを切り捨てながら、今度は急いで地上を目指す。

◆

「ゼェ、ゼェ、ゼェ……」

ダンジョンを登り切り、バベルの一階でベルを床の上に放り出したザールは肩を上下させて息を整える。しこたま酒を飲んだ後、身体を雨で冷やしながら走って、ダンジョンに入っては戦いながら走って、出る時は人一人担いで走って、ようやく安全地帯に着いた所で体力の限界を迎えていた。

下手をしたらモンスターとの戦いではなく、身体を壊して死んでいた可能性もある。恐らく彼はもう二度とこのような事はしないだろう。

「ぐ……あ、ザール……さん……？」

興奮が落ち着いてきたベルは自分を担ぎ出したのがザールだという事に、ようやく気が付いた。全身には切り傷や打撲の痕が刻み込まれている。

「ハァ、ハァ、ハァ……【メリディアよ　光の女神よ　命の輝きに薪をくべよ】【治癒の光（ファースト・ヒアリング）】」

　ザールは息を切らせながらベルに手を向け、呪文を詠唱する。ベルに向けた彼の左手から、春の陽と同じくらい温かい光が溢れだし、ベルを包む。すると、彼の身体の負傷がゆっくりと治っていき、痛みも消えていった。
「あ、あの、ザールさん……何で――――」
「歯を食いしばれ」
「ぶっ！」
　ザールは治療したばかりのベルが起き上がった所で、彼の顔を思い切り殴りつけた。ベルの身体が浮き上がり、地面に投げ出される。
　ベルに対して色々と言いたいことはあったが、今は長く喋る気力はないので、拳一発に気持ちを込めて叩きつけたわけだ。
「次はないと思えよ」
　そう言うとザールはベルの腕を乱暴に引っ張って彼を起こすと、首に肩を回して体重をかける。回復魔法をかけられたとはいえ、まだ体力の回復しきっていないベルは成人男性の重みによろめくが、なんとか踏みとどまった。
「私はもう、疲れた。このまま廃教会まで連れていけ」
「は、はひ……」
　殴られた頬が腫れたベルはまともに返事をすることができなかったが、だからと言っ

てザールを放り出していくことはしなかった。心の片隅では「余計な事を」と思っているが、それよりも無茶をした自分を止めたことに感謝をしていた。

ザールはと言うと、ベルに体重を預けたことで疲れの表面化が顕著になったのか、意識も朦朧とし始めていた。

二人がバベルから出ると雨は上がっていたが、外はこの世の終わりのような暗黒に包まれていた。もうすぐ夜明けだ。

「何故、あんな事を……？」

いつものような力がない口調で、ザールはベルに問う。

ベルは道の石畳を眺めながら、こう言った。

「強く……なりたかったんです……」

酒場でバカにされたことを悔しがり、がむしゃらに死地へと飛び込んだ。

ザールからすれば馬鹿としか言いようのない愚行だが、ベルは少年から大人になろうとしている。ならば、命を賭ける事に誰が文句を言う資格があろうか。

今回、ザールがベルを止めたのは、彼が未だ戦士ではなくただの凡人だからだ。凡人は戦場に出すべきではない。

だが、強くなりたいとベルが言うのならば、彼を戦士にするというのは悪くないだろう。

「そうか……」

冷たい朝の空気に包まれた二人は、白い朝日に照らされて廃教会に到着した。

# 6

時計の音が無機質に響く部屋。
壁にかけられた時計は午前五時を指している。
ヘスティアは腕を組んで同じ場所を行ったり来たりしていた。
（遅い…）
バイトから帰ってきて待っていたのは、ガランとした部屋だった。ベルはザールと飲みに行くと言っていたので遅くなると思っていたが、帰ってきたザールはベルとは一緒ではなかったと言って彼を探しに行った。
飛び出していったザールを追いかけようかと考えたが、ヘスティアがいない間にベルが帰ってきたら入れ違いになってしまう。そう考えて彼女は残った。
もしかしたらどこかで酔いつぶれているのかもと、少しの間近辺を探し回った収穫はゼロ。その間に一人で戻ってきているか、ザールが連れ帰ってきているかしているかもと廃教会に戻っても誰もいなかった。
（ザールくんの「男になり始めているのなら」っていうのは、どういう事なのだろう？）
ヘスティアはザールと出会ってまだ二日目。対して彼の事を知っている訳ではない

が、それでも彼がベルの事を多く知っているわけではないという事はわかる。そんな彼がベルの事を語ったのが、どうにも腑に落ちなかった。

（男同士の哲学ってやつなのかい？　僕にはわからないよ）

再びいても経ってもいられず、ヘスティアはベルを探すために部屋から出ようと扉に駆け寄った。

「ぶぎゅ!?」

ヘスティアがノブに手を伸ばした時。その瞬間を見計らったように扉が開かれてヘスティアを弾き飛ばした。

ヘスティアは背中からコロコロと床を転がり、ソファにぶつかった所で止まる。

「ああ？　何かドアの前にあったのか？」

「あ、いえ、神様が……」

痛みにのたうち回っていたヘスティアだったが、頭上から降ってきた声を聞いて目を見開いた。

声の主が無事を望んで止まなかった人物と、その彼を探しに行った人物だと察知して、ヘスティアは勢いよく立ちあがった。

「ベル君！　ザール君！　って、ベル君どうしたんだいその恰好と顔！　ザール君も、血まみれじゃないか！」

二人の帰還を喜びそうになったヘスティアだったが、その姿を見て言葉を失った。
ベルは纏っている服が見るも無残なボロになっており、もはや縫い直したりするのは不可能と言うしかない状態であった。身体に怪我らしい怪我は殆ど見受けられないが、その頬の片方は赤色に腫れあがっている。
ザールは一見血まみれで大怪我でもしているのかと思ったが、良く見れば彼の纏っている防具に新しい傷は一つもなかった。つまり、彼の鎧を赤く染めているのは殆ど返り血だということだ。
血相抱えたヘスティアが二人に迫り寄る。
「え、え、え？　二人とも、その姿はどうしたんだい!?　まさか、どこかで強盗にでもあったんじゃ……」
「強盗ならよかったかもな」
ザールはベルから離れると、ヨタヨタした足取りでタンスに向かい、鎧を脱いで着替え始めた。女性がいるのにあまりにも無神経だが、そんなことより彼は早く身体を休めたいようだ。
一瞬だけシャワーを浴びることが頭をよぎったが、それをするくらいならばより長く寝たかった。
「強盗ならよかったって……ちゃんと説明してくれよ！」

ヘスティアの問いかけを無視して、普段着に着替えたザールは乱暴にタンスの扉を閉め、ソファに近寄ると伐採された木のようにそこへ倒れこんだ。
「私はもう寝る。話はそこの愚か者から聞け」
疲労困憊といった様子のザールは、背中をヘスティアに向けて横になり、そのまま意識を手放して眠りについてしまった。ヘスティアはザールを叩き起こして抗議しようと思ったが、聞こえてきた寝息にそんな気も失せてしまった。
再び部屋に時計の音の静寂が訪れる。今度はそこにダンマーの寝息が混じっているが。
「……ベル君。君は、いったいどこへ行っていたんだい？」
ヘスティアは数秒の沈黙の後、意を決したようにベルの方へ向き直って問うた。誤魔化しやだんまりは許さないと言う眼差し。
仮にも神の問いかけであるためか、ベルは観念したように口を開く。
「……ダンジョンに、潜っていました」
「そ、そんな恰好で……一晩中？」
鋼板すらつけていない、ダンジョンでは裸同然の姿。モンスターの一撃一撃が致命傷になりかねない。怪我らしい怪我は少ないようだが、切り刻まれた服がそのことを物語っていた。

とりあえず、ヘスティアはベルをザールの寝ている向かいのソファに座らせ、彼女もその隣に腰掛ける。

「……どうして、そんな無茶をしたんだい？　多分、ザール君が途中で助けてくれたんだと思うけど、そうじゃなかったら死んでいたかもしれないんだよ？」

ベルの手を握って問いかける。

「……神様。僕は……弱いです」

「……」

「馬鹿にされて、悔しくて、でもそれは本当の事で……」

ヘスティアの手の上に、小さな雫が落ちる。苦渋の露、ベルの肩は震えていた。

小さな女神の手が少年の背を撫でる。母親が幼子を慰めるように。

やがて少年は顔を上げ、女神の顔を見つめる。涙にぬれたその眼差しは、ここではないどこかへ、真っ直ぐに向けられていた。

「神様……僕、強くなりたいです……」

「……うん」

女神は頷く。

「……」

ダンマーの寝息は止まっていた。

◆

ザールが目を覚ました時にはもう外は昼になっていた。元々生活サイクルが安定していなかった彼としては別段気にすることでもなかったが。

スジャンマの酔いはすっかりなくなっていたので、汗まみれの身体をシャワーで洗い流した後、ヘスティアにステイタスの更新を頼んだ。

レヴァン・ザール

Ｌｖ．１

力　：７→２９

耐　久：０→３

器　用：１１→３２

敏　捷：９→３３

魔　力：１７→３２

魔法

【ライトニングボルト】

・速攻魔法

【嵐の精霊召喚】

・低級の雷の精霊を召喚する

【治癒の光】
・聖なる光が傷を癒す
スキル
【火山の民(アッシュダンマー)】
・炎への耐性
・炎による影響を５０％カットする
【技術師範(スキルトレーナー)】
・自らより劣る者の技能を訓練することでその能力を確実に向上させる
・トレーナーの技量が見習い以下の技能は対応されない
・対応技能【剣術・達人】【破壊魔法・精鋭】【回復魔法・精鋭】【召喚魔法・熟練者】【軽装・熟練者】【防御・精鋭】【隠密・精鋭】【開錠・精鋭】

昨晩、ベルを連れ戻すために無茶をしたせいか、ステイタスの伸びはかなり良かった。だが気になるのは、彼のスキルが増えているという事だった。

「ヘスティア。このスキルは一体何だ？」

ステイタスの写し紙を指さしてザールが尋ねる。ヘスティアはその紙を受け取ると、増えているスキルとザールをチラチラと交互に見る。

「説明にも書いてあるだろう？　要は、君はとっても教え上手になったってことさ」

「そんな事はわかっている。私が聞きたいのは、何故突然スキルが増えたのか、という事だ。対して特別な事はしていないぞ」

ザールが聞いた話によると、スキルという物は当人の資質によって発現する者だと聞いたことがある。例えば、英雄の素質があるならば強い力を、悪人の素養があるのならば人を操ったり陥れたりするような能力などだ。

ザールはこれまでの人生で人に何かを教えたりするような立場に立ったことはない。素人と組んで仕事をすることはなかったし、弟子を取るなんて面倒な事もやったことがなかった。

と、言うのも、ダンマーは長寿であり保守的であるため、技術の伝授や継承は親族以外には滅多にしないのだ。弟子を取る魔術師であってもそれが親族でなければ実験の被検体程度にしか認識しない事などザラだ。

ザールは行きずりの女以外で異性と交際をしたことがなかったので、子供はいるかもしれないが会った事はないし顔も知らない。故に経験を伝授する相手などいなかった。

つまり、ザールが人にモノを教えるスキルが現れるなど考え難いのだ。

「う～ん、と、ね。スキルっていうのは、当人の資質によって発現したりするんだけど、その他に意識の変化によっても目覚めたりするんだよね」

「意識の変化？」

「うん。例えば、英雄になる素質があったとしても悪意を抱けば力は悪い方に働くし、悪人になる素養があったとしても悔い改めれば能力は人を幸せにできるかもしれない。スキルっていうのはね、そう言った人の意識に敏感に反応して現れる物なんだよ」

その説明を聞いてザールの頭に浮かんだのは、白髪の少年の姿だった。どうも無意識の内に彼に感化されていたようだ。

「たぶん、ベル君に関係があると思うんだけど、どうかな？」

「さあな。私には何がなにやらさっぱりだ」

すっとぼけたザールだったが、ヘスティアがにやけ面になり、それ見た所で「あー、クソ」と頭を抱えた。

「ムフフ……照れ隠しなんて、冷酷な元傭兵クンも可愛い所があるね」

神に嘘はつけない。正確に言うと、言葉の真偽を即座に見抜かれてしまうのだ。ザールが嘘をついたとなると、その言葉は反対の意味を持つことになる。

「プフフッ……むぎゅっ」

頬を膨らませて笑いをこらえるヘスティアの顔が癪に障ったザールは、枕を取ってそれを彼女の顔に押しつけた。

「仕事に行ってくる」

顔を隠すように兜をかぶり、ザールは部屋から出ていく。

リビングに入ると、そこのソファにはベルが座っていた。頬には大きな絆創膏がバツ印を描くように張り付けられていた。
「あ、ザールさん。終わったみたいですね」
ベルの表情はどこか硬い。殴られたことで彼に対して苦手意識でも持ったのか、あるいは昨晩の愚行を反省しているのか。
だがどちらにせよ、今回ザールはベルを連れて外に出るつもりでいた。
「出発する準備をしろ。お前にはやらせておく事がある」
「え？　は、ハイ！」
ベルは弾けるようにソファから立ち上がると、クローゼットに寄って準備をする。鋼板の鎧を身に着け、ダガーをベルトに刺し、カバンを持って準備をする。
「え、ええと、ザールさん。いえ、閣下」
「私を隊長（サー）とでも呼ぶつもりか？　私は兵士ではないし、ここは軍隊でもない」
「は、はい。閣下、いえ……ザールさん」
妙に畏まった態度を取ったベルを少し咎め、ザールはベルを連れて地上に上がる。向かう先は昨夜と同じくバベルだが、その時程急いではいない。
「あ、あの。ザールさん」
「レヴァンでいい」

「レ、レヴァンさん。今日は何階層まで行くんですか？」
期待しているような、緊張しているような、そんな声色で尋ねるベルをザールは歩みを止めることなく横目に一瞥し、すぐに前を見る。
「いや、今日はダンジョンには潜らん。お前も昨日の今日で体力が減っているだろうし、何より準備ができていない」
「準備ですか？」
ベルは歩きながらカバンの中身を検め始める。
「ええと、ポーションはあるし、コンパスも忘れていない。携帯食料もあるし、地図もある……」
「ああ、そういった細々した道具も必要だな。だがな、お前はまだ持っていない物がある。今日はまず、それを買いに行く」
「買い物、ですか」
それ以降、ザールは無駄な口を叩くことはなかった。ベルは何を買うのか気になりはしたが、とりあえずはザールに黙ってついていく事にした。
スラム地区を抜けて人通りの多いメインストリートに出た頃、ベルはある所で立ち止った。
「あ、ザールさん！　少しだけ待っていてもらえますか？」

「ああ？　……ああ、成程な。長くは待たせるなよ」
ベルが立ち寄ろうとした所は昨夜の酒場、【豊穣の女主人亭】だ。食い逃げの件を謝るために寄るのだろう。
一礼してベルは店の中に入っていく。直後、叫び声が聞こえてきたがすぐに収まった。
長く待たせるなというザールの言葉を真に受けたのか、ベルは数分後に慌てて店から出てきてザールに「すいません！」と頭を下げた。手にはなぜか藁編みのバケットを持っていた。
「戻ったか。では、行こうか」
「あの、レヴァンさん。立て替えてもらったお金を返したいんで、少し止まりませんか？」
頭を下げるベルを特段気にする様子もなく、ザールは歩き始め、ベルも慌てて続く。
「金はいい。それで買わせたい物がある」
ザールの言うことはイマイチ要領を得なかった。目的の場所に着くまで何も語るつもりはないらしい。
二人が着いたのはバベル、ではなく、そこを経由して北西のメインストリートに向かった。そこは武器や防具の店が多く、それに比例して冒険者の往来も他に比べて多

かった。彼等の目的は言うまでもないだろうが、より良い武具を探しに来たわけだ。
「お前にはここで兜を買ってもらう」
ザールには不思議でならない事がオラリオに来てからたくさんあったが、その内の一つに多くの冒険者が兜を被っていないという事があった。
人間、手や足や腹が貫かれれば重傷ではあるが死ぬには足りない。だが頭を破壊されれば一瞬で終わってしまう。そうでなくても頭に攻撃を受ければ考える能力は低下し、危険を脱する知恵も、敵を観察する推理もできなくなってしまう。頭を守るという事は、戦場において命の7割を守る事に他ならない。
そして、御多分に漏れずベルも兜を着けていない冒険者の一人だ。戦場に出す前に、まずその準備をさせておく必要があると感じたのがザールだ。
「え、兜ですか？」
だが一瞬、ベルが嫌そうな顔をしたのをザールは見逃さなかった。
「兜が嫌なのか？」
「あ。い、いえ、そういう訳じゃあないんですけど……なんと言うか、少し野暮ったいかなぁって思って痛っ！」
ベルの頭に突如衝撃が叩き込まれた。ゴッという石のような音が自分の体から聞こえた事を、ベルは信じることができなかった。

痛みに頭を押さえて目を開いて見ると、ザールが握りこぶしを作っている姿を見た。どうやらベルにゲンコツを見舞ったようだ。
「い、いきなり何を――――！」
「もしも、兜を被っていたのなら、私の今の拳は防げただろうな」
抗議するベルの言葉を封じる。こればっかりはどんな理由があろうとも自分が絶対に正しいと、ザールは確信しているからだ。
今のがザールのゲンコツだったからまだ痛いで済んだが、これがモンスターの牙や爪だったらどうだろう。間違いなくベルは命を落とす。兜を被っておけば不意に頭を攻撃されても生存できる確率は高くなる。だから戦士には兜が必要なのだ。
「恰好を気にするのは達人の特権だ。達人でない内に恰好を気にするのはただの馬鹿だ。そしてお前はただの素人。まずは戦場で自分の命をどう守るかだけ考えろ」
そう言ってザールは歩き出す。ベルは少しだけ彼に不満を持ったが、言っていることは正論なので言い返すことはできない。黙って彼についていくだけにとどめた。
「ん？」
「うぷっ。どうしましたか？」
ふと、突然ザールが立ち止り、ベルはその背中にぶつかった。ザールは辺りを見回した後、その視線をベルの、その頂点に向けた。文字通り雲の上を仰ぎ見ている。

「……いや、なんでもない。行くぞ。まず、あの店に行こう」
そう言ってザールは再び歩き出す。ベルは「何だろう」と疑問に思ったが、それ以上に彼の右手が剣の柄に伸びていた事に、不穏な物を感じていた。

◆

オラリオで一番高い所、バベルの頂点はある人物のプライベートスペースになっている。家主の趣味なのか、薄暗い部屋だったが花のように甘い香りで満ちていた。
そして、その中で輝くような美しさを持った彼女がここの家主だ。恐らく、いや、確実にこのオラリオで一番美しいのは彼女だ。相貌、プロポーション、雰囲気、何をとっても彼女に敵う者はこのオラリオで、いや、この世界では少ないだろう。
彼女は両手を窓ガラスに当て、オラリオの北西方向を見ているが、その目じりは少しだけ吊り上がっていた。美女の怒った顔は恐ろしいと聞くが、世界最高レベルの美しさを持った彼女のもたらす恐怖はどれほどの物だろうか。
「……邪魔ね、あの灰色ネズミ」
その小さな呟きは誰の耳にも届くことはなく、オラリオの空に消えていった。

◆

「クソみたいな店だったな」
憤慨したような言い方で道を行くザールの口調は少し怒っているようで、ベルはそれ

に苦笑いで答えるしかなかった。
　二人が最初に入った店は、一見立派な鎧を売っている優良店に見えたが、長年の経験を培っていているザールはすぐに見抜いた。その店は粗末な武具の表面をメッキ塗装で立派に見せかけているだけだという事に。
　危うくベルはその店の兜を5年ローンで買いそうになったが、直前でザールが止めたために事なきを得た。
「ああいった詐欺店には気を付けろ。最悪、入っただけで入場料を請求するようなクソも混じっている」
「えーと、気を付けます。あ。あのお店なんてどうですか?」
　その後も二人は様々な店に立ち寄ったが、納得のいくような所はなかった。値段の割に性能が悪かったり、性能はよさそうだがベルの手持ちでは手が届かなったりした。
　現在は午後2時。一時間半も探して兜一つ見つからないとはベルは思ってもみなかったが、ザールからすれば武具は慎重に選ぶ物なのでどれだけ時間があっても足りない程だ。まあ、それもほどほどに留めておくが。
「そろそろ休憩するか。昼飯もまだだしな」
「あ、それならこのサンドイッチ食べましょうよ」
　二人は適当な公園に立ちより、そこのベンチでベルの持っていたバケットの中身であ

るサンドイッチを食べ始めた。
　ザールが取ったのはフライサンドのようで、挟まっていたフライの中身はカニか何かのようだった。海産物を食べているという所で、ザールはかつて戦った巨大な魚人のモンスターを思い出したが、奴の肉はきっとマズイのだろうなと一人ごちた。
「美味いな。豊穣の女主人亭で売っていたのか？　ダンジョンに持って行く弁当にはよさそうだ」
「あ、いえ。これは売り物じゃなくて、あの店の店員のシルさんって人に貰ったんです」
　二つ目に手を伸ばそうとした所で、ザールはその手を止めた。そしてギギギと、油を差していない古代ドワーフの自動人形のような動作でベルを見る。
「……そのシルっていうのは、若い娘か？」
「え？　ハイ、僕と同い年くらいですけど、それがどうしたんですか？」
　その一言で、ザールは色々と察した。
「……それは全部、お前が食べろ」
「え？　でもレヴァンさんもお腹空いているんじゃ……」
「私はいい。そのサンドイッチはお前だけに食べる権利がある」
　ベルはザールの言葉がイマイチ理解できなかったが、サンドイッチを独り占めできるヤッター程度の考えに留めておいた。

（シルか……あの店員の誰かは知らんが、すまんな）

誰とも知らない少女に向けて、ザールは心の中で謝罪した。

# 7

「そろそろ行くか」
ベルがサンドイッチを食べ終わった所で二人は立ち上がり、店探しに戻ることにした。
「オラリオ広し。とはいえ、良い店は中々見つかるものではないな」
「そうですね。何か、基準というか、指標みたいな物があればいいんですけど……」
歩き回っている内にそんな事を言い出したベルは、何気なくザールの鎧に目をやった。無駄を排除した流線形状の軽装鎧。実用性をかなり重視した鎧。
ベルとザールは知り合ってまだ三日だが、彼は本拠地で寝るとき以外はいつもこの恰好だ。ダンマーという自分の正体を隠すためでもあるのだろうが、恐らくは傭兵時代のクセが抜けていないのだろう。
そこで、ベルは気になることがあった。ザールの鎧は戦闘のプロである彼が選んだ物なのだから上物なのだろうが、よく見るとその装甲が何でできているのかわからないという事に気が付いた。灰色混じりの暗い黄色の素材で、恐らく金属ではない。どことなく生物的な雰囲気があるように見える。

ふと、ザールがベルの視線に気が付いたのか、足を止めて彼の方へ振り返った。
「私の鎧が気になるか？」
「はい。その防具の装甲って鉄、というか金属じゃないですよね？　何かの骨とかですか？」
「ああ。まあ、少し違うがな。これはキチンの鎧だ」
「キチン？」
聞きなれない単語に、ベルの頭の中に疑問符が浮かぶ。
キチンとは、節足動物や甲虫の外骨格のことだ。具体的に言えば、カブトムシやカニなどの甲殻がこれに値する。
「そうだ、キチンだ。私の故郷、アッシュランドに生息する昆虫の甲殻からできている。軽装にしては重たい方だが、非常に頑丈な上、構造的に優れていて非常に動きやすい」
「甲殻？」
幼少期、ベルは祖父と山に入ってカブトムシやクワガタムシを捕まえたりして遊んでいたことがあった。虫の外殻は確かに頑丈ではあるが、それを百匹二百匹分集めたところで剣の一撃に耐えられるとは思えなかった。
自慢の鎧の信頼性に疑いの眼差しを向けるベルに気付いたザールは、喉を一つ鳴らした。

「舐めるなよ。ダンマー秘伝の魔法鍛造で鍛えられた鎧だ。こう見えて鋼鉄よりずっと頑強に出来ている」

「おお……」

「秘伝の業で鍛えられた魔法の鎧」という物がベルの思春期男子特有の琴線に触れたらしく、疑いの眼差しは一変して憧れへと変身した。

それに気を良くしたザールはマスクの下でにんまりと笑う。

「秘伝といえば、私のこの剣もエルフ伝統の業で鍛造されたものでな――――」

ザールが自身の装備の事をベルに自慢している内に、二人は次の店の前にやってきた。表通りの店がしっくりこなかったので裏路地に入った所で見つけた。

巨大なハサミを模して造られた看板から、一見すると一般で使う金物屋のように見えるが店先の格子窓の内側にあるマネキンに鎧を着せているので防具も売っているようだった。

入り口から店の中に入ると、そこは薄暗い雰囲気のどんよりした所だった。両脇を建物に挟まれ、さらに入り口の方向も太陽光が入りこんでこないようになっているためそうなっているのだ。

だが陳列棚には冒険者向けの武器や防具がズラリと並んでいる。それも、どれもこれも丁寧に、客に見やすく配置されているため、この店の主人の几帳面さがうかがい知れ

る。

「ん？　ああ、ようこそおいでやす」

二人の気配を察したのか、店の奥から一人の女性がやってきた。

身長は女性にしては高い方、１６７Ｃほどだ。上質なシルクのような白髪。それに合わせるような、新雪のように白い肌。

着ている服は黄色とオレンジ色のドレスだが、作業着に使われるような頑丈な布を材料にしているらしい。

黄色い目は眠たそうな半開になっているが、非常に整った顔立ちをしているし、神々しい雰囲気もある。どうやら女神のようだ。

「ああ、お客はんが来たのは久々どす。うちはヘカティア。ヘファイストスやゴブニュん所（トコ）には敵いまへんけど、どうぞ、ゆっくり見いっとおくれやす」

おっとりとしてはいるが、じれったくはない。独特なイントネーションの言葉使いは、ザールにロキを連想させた。

ヘカティアは優しい微笑を二人に向ける。ザールは特に何も思わなかったが、ベルは顔を赤くして目を逸らしてしまう。その様子が面白かったらしく、彼女は小さく笑った。

「フフフ、初々しい子ぉどすなぁ。可愛おす」

「女神、コイツを気に入ってくれたのなら何よりだ。今日はコイツの買い物なんでな」
「ほう、そうどすかぁ。うちでよければ案内するよ」
ヘカティアがベルの頭を撫で、「うちとおそろいどすなぁ」と笑う。
もはやベルは最初にザールと会った時のように、真っ赤なトマトみたいな顔になっていた。
「……フム。私はあっちで武器でも見ているから、自分で用件を伝えるんだな」
「え、ち、ちょ、ちょっと！　レヴァンさん!?」
男にでもなれ、と言いたげにザールは二人から離れ、片手武器の陳列棚の方へと歩いていった。
今の所、ザールは自分の剣に満足しているので、しばらく買い替える必要はないと思っているので今日買う予定はないが、暇つぶしに見るのも悪くない。それに、剣はそうでも多目的用の短剣は今使っている物よりも良い物があるかもしれない。
（むう、良い剣だ）
目に付いて手に取ったのは鋼鉄の剣。肉厚で幅広だが、根本の部分は少し括れている。この意匠は軍神アレスが統治しているラキア帝国が昔使っていた剣に似ていた。
直剣にしては短いが、これには理由がある。ラキアはその昔、今の大帝国に発展する以前に北方の種族【ノルド】と戦争をしていた。当時のノルドは獣の毛皮の戦闘服を纏

い、グレートソード、両手斧、戦鎚など、両手で持つような大型の武器を好んで使う、破壊力のある戦士たちだった。これに対してラキアが取った戦術は防御であった。

ラキアの兵士たちは自分の身体を隠すほどの大きな盾を持って身を守り、それをノルドが力任せに叩き割ろうと武器を振り上げたところで、小回りの利く短い剣を突き刺すという戦闘スタイルを取った。この戦法はノルドたちに対して非常に効果的であり、ラキアは彼等の国を征服して傘下に治めた。

現在は鎧の技術発達に伴い、武器は剣から打撃力を重視したメイスや斧などに取って代わられ、この様式の剣はラキアからなくなったが、正規兵でない帝国出身の傭兵や冒険者はこの様式の剣を持つことが多い。彼等の栄光への最初の一歩であるので、験担ぎの意味合いがあるのだ。

（確かに良い剣。だが、鋼鉄は私の剣に劣るし、何よりラキア式というのは気に入らん）

ザールは内心毒づいて剣を棚に戻した。

アッシュランドとラキアはかつて同盟を結んでいたが、ある二つの事件を発端として同盟は解消され、しかも戦争に至った。

戦争になる前に国力が弱まっていたアッシュランドは、何とか征服されることこそま逃れたものの、国土の一割に当たる広さの島を奪われたにもかかわらず、その島は火山灰を運ぶ風の直撃コースだったので資源に乏しく、貿易も少なくロクに支援されていな

いために半ば放置状態だ。自分たちの領地でないからアッシュランドが援助することもできないでいる。統治者が人格者でなければ、島の街はとっくに滅亡していただろう。

そんな経緯があるためザール、と言うよりも、ダンマーは帝国に対して良い感情を持っていないのだ。

（しかし、このラキア式の剣を除いても、他の武器も業物揃いではないか）

材料は青銅、鉄、鋼鉄など、オラリオの冒険者が長く使うには向かない物ばかりだが、その作りは達人の域にある。人間ではここまで極めるには寿命が足りないだろうし、エルフであっても２００年は修行しなければ作れそうにない。恐らくヘカティアが打った物だろう。

その割に、値段を見ると驚くほど安い。通常の物より高額だが、物と値段の価値が釣り合っていない。法外な値段というのは高すぎる物に使う言葉だが、これに限っては逆だ。新人冒険者には打って付けという他はないだろうが、何故こんな店が日の目を見ないのか、ザールとしては非常に不思議だった。

「ん、このダガーは良いな。買っていこう」

暫く陳列棚を眺めていて、手に取ったのは鋼鉄のダガー。ザールが今使っている物は刃こぼれがしてきていたため、買い替えるには丁度良かった。

清算のためにカウンターに向かった所で、調度ベルも目的の品を見つけたようでバッタリ出くわした。
片手には気に入った兜を持っている。だが不思議なのは、もう片方の腕にヘカティアが絡みついていて、彼の顔にキスマークが大量についているという事だ。
「んもう、ヘスティアの子ぉならもっと早う言うとおくれやす。あの人の子ぉなら、うちん子も同然どす」
「レ、レヴァンさぁ～ん。助けてぇ～」
口では嫌がっている素振りを見せているが、その顔はうれしそうに見える。男になれとふざけた心境でベルを放置していたザールだったが、まさかこの短期間でこれほどまでに仲良くなるなど予想外だった。
だが、口ぶりから察するにヘスティアの関係者らしい。思わぬところで縁があるものだ。
「仲が良いのは結構だが、もう放してやってくれないか？　そろそろ火山のように噴火しそうだ」
「ああん、もう、いけずぅ」
ザールはベルの手を引いてヘカティアから引き離す。
「んもう。もしかして、羨ましいんどすか？　あんたにも接吻してあげまひょか？」

そう言いながらヘカティアはザールに近寄って彼のマスクを外そうとするが、ザールは彼女の手首を握って「やめろ」と止めた。ダンマーの男に口づけしたがる異種族などいないと思っている故。

ヘカティアが唇を尖らせてすねたところでザールは彼女の手を放した。

「会計を頼む」

「はいはい、わかりましたよう。もう、お堅いお人は好かんどす」

ザールはヘカティアにダガーの代金を渡した。

「古いダガーの買い取りはやっているか？」

「ええ、やってますで。買い取りはそれでええんどすか？」

「ああ、頼むよ」

ザールは古い短剣をカウンターに置いてヘカティアに見せる。彼女は短剣を鞘から貫き、その刃を念入りに改める。

「随分と使いこんでますね。刃がボロボロ。これじゃあ、二束三文にしえらいてはりまへんけど、ええんやろうか？」

「ああ、構わん」

持っていたところで古い短剣を使う事はないし、それならはした金でも換金できたほうがいい。

ヘカティアはカウンターの上に１００ヴァリスだけ置いて、ダガーをカウンターの裏にしまった。研ぎなおすか、溶かして再利用でもするのだろう。
「まいどおおきに。ほな、次はあんたのどすなぁ、ベルはん」
誘惑するような口調。ベルが代金をカウンターの上に置くと、ヘカティアはその手を優しく包んで微笑んだ。再びベルの顔は真っ赤になるが、多少は慣れたのかヘカティアの目を真っ直ぐに見つめ返していた。
「……んんっ！　もういいか？」
居たたまれなくなったザールは喉を鳴らして二人のイチャイチャを中断させた。唇を尖らせたヘカティアはベルの耳に口を近づけると、何かをつぶやいて彼を解放する。
店を出て行こうとしたが、そう言えばとザールは聞きたい事を思い出して足を止める。
「そういえば、ヘスティアとはどういう知り合いなんだ？　随分と親しそうに話していたが」
ヘスティアの子供なら自分の子供と同じと言うほどだ。ただの友達という訳ではなさそうだ。
するとヘカティアは「ホホホ」と笑った。
「うちはヘスティアの姪どす。あの人の弟の娘なんよ」

「え、えええええええええええ！」
友達どころか二人は血縁者だった。衝撃の事実にベルは大声を上げ、ザールの鼓膜にダメージを与える。
「ぎょうさん可愛がってもろうて、ぎょうさん可愛がった。うちがヘラの阿婆擦れにいじめられた時は、おつむをよう撫ぜてくれた。あの人他の神様にからかわれた時は、うちがお返しに撫ぜたった。ほんまにええ神（ヒト）どした」
懐かしい記憶に浸りながらヘカティアは言う。二人の仲の良さがひしひしと伝わってきた。
「そういえば、地上に降りてからは会うてまへんどした。あの人は元気どすか？」
「まあ、神なんだから病気とかはしてないな。昨日はこの小僧のせいで肝を冷やしただろうが」
「ちょ、レヴァンさん、止めてくださいよ！」
ザールはベルの頭をつっつく。叫び声を間近で聞かされた事への仕返しも込めてだ。
「んん？　何の事かはわかりまへんけど、久しぶりにヘスティアに会いたいさかい、今度遊びに行ってもええどすか？」
「ええ！　是非！」
「フフフ、おおきに」

ベルは本拠地の場所を彼女に教えた。ザールとしてはヘスティアの面白い話を聞けそうだと、内心期待している。

目的の買い物を済ませたし、ヘカティアとの約束も取り付けたので店を出る。今日はもうダンジョンに入るには遅いので、二人はそのまま本拠地へと向かった。

# 8

「ベ、ベベベベベ、ベルくぅうううううん！　どうしたんだいその顔はあああああぁぁぁぁぁぁ!?」
「え、ええと、神様！　これには事情が――――って！」
本拠地に帰ってきたベルの顔を見るなり、ヘスティアは狼狽して叫んだ。彼の顔のキスマークはまだ消えていなかった。
ヘスティアは弾けるようにベルの下へ行き、胴体に手を回して腹に顔をうずめる。
「クンカクンカ、スンスン……ほ、ほ、ほ、ほほおほほほほ、他の女神（オンナ）の臭いがするぅうううううう！　君たちはいったいドコに行ってきたんだ!?　ま、まさか、歓楽街か!?　そこに行ったんだな！　ザール君が連れて行ったんだな!?　純心なベル君をそそのかしたんだな!?　さあ、キリキリ吐け！」
ベルから離れたヘスティアは動揺しながらも怒り狂い、ツインテールの髪を逆立てて猫のように「フシャーッ！」と威嚇をする。
「落ち着け。普通に武具屋に行って、普通に買い物をしてきただけだ！」
「神に嘘は通じなぁい！　でも嘘は言ってなぁい！　いったい何があったら武具屋でキ

スマークと女神（オンナ）の匂いがつくんだよ!?」
　ザールの言葉の真偽を確かめて尚も喚きたてるヘスティアを無視し、ザールは彼女の後ろに目をやる。今晩の夕食は先日のようにジャガ丸くんだけという物ではない。サラダが盛り付けられたボウル、ミートパイ、ライ麦パン、安物のワイン、それにいくつかのジャガ丸くんだ。前のザールの稼ぎが食卓に彩りを加えているという事は疑いようもないだろう。
　だがその彼の視線を遮るように、小さな手が飛び跳ねながら振られる。
「ダメダメだぁめ！　ちゃんと説明するまで晩御飯はお預けだぞ！」
　ちょろちょろ跳ねまわるヘスティアは鬱陶しいが、実力行使に出るわけにもいかず、ザールは面倒がりながらも事情を説明することにした。
「今日行った武具屋で、お前の姪だという女神に会った」
「え？　姪？　僕の？」
　途端にヘスティアの動きが止まった。
「……姪って、誰さ？　あんまり自慢できるような事じゃないけど、僕には甥や姪がいっぱいいるんだぜ」
　そう言うヘスティアは何かを思い出したように、苦々しい顔つきになったが、まさかヘカティアの事を厄介に思っているのだろうかと、二人は少し不安になった。

「ヘカティアだ。新雪のように白く、蜂蜜酒のように情熱的な女神だったぞ」
「え！　あの子も地上に来ていたのかい!?　と、言うか、オラリオにいるのか！」
「ああ、北西地区の裏路地で鍛冶屋を営んでいた。あまり儲かっている様子はなかったが、かなり良い店だったよ」
　ヘスティアは落ち着きを取り戻し、嬉しそうな表情になる。
「そっかぁ……ヘカティアがいるんだ……」
　ヘカティアと同じように昔を懐かしむように呟く。二人にはどことなく似たような雰囲気があり、やはり彼女たちが血縁者だという事が察せられた。
「仲がよろしいようで大変結構。そろそろ晩飯をいただこうか」
「そうですね」
「あ。ダメ、ちゃんと着替えて手を洗ってからだよ」
　何とか誤魔化せたと、二人は防具から普段着に着替えて食卓に付く。
「さあさあ！　今日はザール君のおかげでご馳走だ！　お腹いっぱい食べようじゃないか！」
「いただきます」
　ベルとヘスティアはライ麦パンから手を付けるが、ザールはコップにワインを注いで食前酒と口をつけた。スジャンマには遠く及ばないし、安物だから味はイマイチだ。し

かし、食卓にワインがあれば食欲が増すのでこれでも良いのだ。
「まさかこんなに早くご馳走にありつけるなんて……ザール君には感謝感謝だよ」
「こんなんで満足されたら困るぞ。何せ、明日からは喉に詰まらせるくらいのコインを稼いできてやるんだからな！」
「いくら神様でもお金は食べませんよ」
冗談を交えながら、食事と会話を楽しむ三人。ザールは笑顔でいる二人の顔を見ながら、永らく忘れていた誰かと食卓を囲むという事の喜びを、ほんのりと思い出していた。
神はその眷属との関係を「家族」と言う事が多いが、ヘスティアとベルの様子を見ていると、成程、確かにそうかもしれない。二人は御主と信徒ではなく、姉と弟のように見える。
神は眷属に血（イコル）を与える。かつてエルフの創造神【アーリエル】が、強大な力を持つ魔王から定命の世界を守るために自らの血を分け与えた事がその源流とする説があるが、すると神と眷属は血族になるわけだ。血のつながりは非常に強固であるが故、両者は家族となる。家族ならば垣根を気にする必要もない。ダンマーの宗教観とはまた違う文化と言えよう。
「そういえば、レヴァンさんに聞きたい事があるんですけど」
ふと、ベルが口の中に食べ物を詰め込むヘスティアをよそに、ザールに話しかけてく

る。
「なんだ？」
「あの、レヴァンさんはもう百年以上も傭兵をやっていたんですよね。わからないのは、どうしてその間にどこかの神様の眷属になったりしなかったんですか？」
「ふぁ。ふぉれふぁほふふぉふぃふぃふぁはっふぁ」
「飲み込んでから喋りましょうよ神様……」
　知っての通り、神の血が与えられた定命の者はその可能性の入り口が広がり、通常の研鑽では難しい程の早さで成長する。力を求める者ならば神の血をもらわない理由はないし、オラリオの外にも神とそのファミリアは多数存在するため、ザールにもその機会は多くあったはずだ。
「ああ、まあ、それはな……」
　ザールの表情が硬くなる。本当は何かを思い出したり、どう答えたものかと悩んでいたりしているだけかもしれないが、ダンマーは常に怒っているように見える顔の造形であるため、ベルはこの質問をしたことでザールの苦い記憶でも掘り起こしたのではないかと、質問をしたことを後悔しはじめる。
（神様から聞いたけど、レヴァンさんはこ（ヘスティア・ファミリア）こに入るまでに尋ねたファミリアの面接を、人種を理由に断られたらしい。もしかしたら、オラリオの外でも似たような事が

あったんじゃ……）

それがベルの表情に出た事で、彼が何を考えているのかを察したザールはすぐさま口を開いた。

「何か勘違いしているかは大体察しはつくが、恐らくお前の考えていることの大半は間違っているだろうよ。ただ、少し長い話になりそうだから、どう話したものかと考えを整理しているだけだ」

ザールは「まずは何から話したものか……」と考える。ベルとヘスティアはザールの話が直接聞けると目を子供のように輝かせ始めた。

やがて頭の整理がついたザールは物語を聞かせるように話し始めた。

今から１１０年程昔の事、当時のザールは【グレーロック】という街で鉱山労働者として働いていたが、その仕事にはほとほと嫌気がさしていた。毎日毎日、薄暗く狭い坑道を行き来し、一日中壁を睨みつけてツルハシを振るうだけの単調な日々。吸い込む空気も悪く咳をしない日はなく、たまの楽しみと言えば酒場で質の悪いスジャンマを啜るくらいだ。

ある時一念発起したザールは、最後の給料をもらってすぐに仕事を止め、斧と鎧を買って街の外に出た。たまに街に来る吟遊詩人の唄の影響か、冒険好きの資質が彼には芽生えていたわけだ。

「最初は斧を使っていたんだ」
「ああ、ツルハシを振るのと似たような物だと思っていたのでな。で、街を出た私はあちこちを歩き回りながら害虫退治や弱いモンスターを追っ払うような簡単な仕事を受けていた」
所謂下積み時代だ。自分の力量を把握していたザールは無茶な冒険はせず、自分にもできそうな仕事を選んでこなして経験を積んでいた。一か所に留まらなかったため、神の眷属にはならなかったが。
ポケットに金が収まる事はあまりなかったが、今のザールができている上で一番重要だった期間はあの頃だったと本人は語る。
「人生の転換期が訪れたのは、旅を始めて十年経った頃、ある貿易キャラバンの護衛の仕事を受けた時だ。彼等は非常に親しみやすい者ばかりで、金払いも良かった。それで、彼等を気に入った私は専属のキャラバンガードになる事に決めた」
貿易キャラバンはあちこちを歩き回り様々な品を取り扱うが、その分賊や野獣、モンスター等の危険は憑き物で、護衛の戦士を雇うのは当然の事だった。幸いキャラバンのメンバーもザールの事を気に入っていたので、彼の事を家族のように迎え入れてくれた。
キャラバンガードになってからのザールは以前よりもずっと広い範囲を歩き回れた。

キャラバンの仲間たちと仲良くしていたし、メンバーの一人の猫（キャットピープル）人の女性とも恋人関係になっていたと、彼は言う。

「だが、キャラバンガードになって三年程経った頃、悲劇に見舞われた。外国の珍しい品を仕入れるためにラキアの北東地域に行った時、そこで【吸血鬼】の一団に襲われたのだ」

「吸血鬼……」

舞台劇や物語にはかなりの頻度で登場する怪物。人々の中に紛れ込み、夜な夜な獲物を求め、哀れな犠牲者の首に牙を突き立てる羊の皮を被った狼だ。ベルの好きな英雄譚の中にも、か弱い女性たちを誘拐して自分の同族に加えた悪辣な吸血鬼の伯爵の話、女吸血鬼が英雄を騙して自分の下僕にしようとした話などもある。

「吸血鬼は当時の私には経験のない強力な敵だった。更に悪いことに、連中を率いていたリーダーは【コールドハーバーの娘】だった」

その単語を聞いたヘスティアの手に力が入る。

「えっと、そのコールドハーバーの娘？　一体、何者なんですか？」

「有体に言えば吸血鬼の王だ。全ての吸血鬼の父であるデイドラの王子【モラグ・バル】本人から直接祝福を受けた者で、通常の吸血鬼にはない強大な力を持っている」

デイドラとは、かつて多くの神々が互いに協力して定命の世界を創造した際、その創

造に参加しなかった神々の総称だ。
だが、世界創造に参加しなかったにもかかわらず、定命の世界を好き勝手に荒らしまわったために創造の神々から怒りを買った。そして、アーリエルを代表とする九柱の神が不死性を捨てる事で、神の力を地上では制限させる防壁を張り、それによってデイドラはその力の大部分を制限される事となった。この防壁内で強力な神の力を使えば、立ちどころに定命の世界から弾き飛ばされるという仕組みになっている。
今日、神が地上でその権能を行使するのに制限が掛かっているのは、この防壁がデイドラだけではなく創造の神々にも影響を及ぼしているためである。
モラグ・バルは弱者を服従させ、支配する事を司る王子で、定命の者だけでなく多くの神にも恐れられている。かつて定命の世界を支配するために、防壁に穴を穿つ業を自分の信者たちに行使させ、異形の軍隊を送り込んだという記録まである。
吸血鬼は彼の被造物と言われているのだ。
「それで、その女吸血鬼は獲物の首筋に牙を突き立てるどころか、斧や剣では届かない距離から獲物の血液を吸い取る術を持っていた。私も、他のキャラバンガードも文字通り手も足も出ずに敗北し、私以外のキャラバンのメンバーは皆死んだ」
思い出した苦しみを和らげるためか、ザールはワインを飲み干した。
何とか生き残ったザールは、地面を這いながら吸血鬼たちの目を盗み、息も絶え絶え

になりながら地面を這って逃げた。
「あそこまで惨めな思いをしたのは、後にも先にもあの時だけだったよ」
　ザールは復讐を誓ったが、あれほどの吸血鬼に対抗できる力などなかった。どこかの神の眷属になって自分を鍛えようにも、当時の彼はすぐに復讐を果たしたかった。そこで彼はデイドラの王子に協力を仰ぐことにした。デイドラとの契約は危険を伴う事が多いが、その恩恵は即物的ですぐに力を手に入れるにはうってつけだった。
「え、デイドラに、ですか……？」
　一変してベルの表情が曇る。
　デイドラは一般的に悪魔と同じような扱いだ。それは前述のモラグ・バルや、破壊を司る【メイルーンズ・デイゴン】、病や疫病を司る【ペライト】などの例からも見て取れる。
　つまりデイドラという存在は、その信奉者たち以外にとっては害でしかなく、その力も唾棄すべきものと言うのが一般常識だ。
「お前がそんな顔をしたくなるのもわかるが、私は特にデイドラという種族に対して嫌悪感はなかったし、そもそも協力を仰いだのは数少ない善のデイドラだ」
　生命と光を司るデイドラの女公【メリディア】だ。彼女は神以外の不死者、モンスターなどの歪な命を持った存在を酷く嫌悪している。吸血鬼への復讐に燃えるザールとは

利害が一致する相手と言えよう。
「メリディアは１００年間、私が彼女の僧兵となる代わりに、私に吸血鬼と戦う力をくれた。不死者を焼き払う聖剣【ドーンブレイカー】だ」
聖剣ドーンブレイカー。アンデッドやモンスターを嫌うメリディアが鍛冶の神と共同で作りだしたデイドラのアーティファクトの一つ。穢れのない純粋な陽の光によって鍛えられており、一凪すれば炎を巻き起こし、また不死者を殺すことで浄化の光を爆発させる力を持った強力な剣だ。
メリディアは彼女の僧兵となった者にこの剣を与え、自らの威光を知らしめる事で世界を浄化しようと考えているらしい。
「え！　ド、ドーンブレイカーを持っていたんですか!?　夜明けの剣を!?」
突然ベルが声を上げて立ち上がった。鼻息荒く、興奮しているように見える。
「あ、ああ。そうだ。太陽の如き浄化の光を発する剣だ。知っているのか？」
「ほ、本当に伝説の通りなんですね！　ええ、知っています、知っていますよ！　ドーンブレイカーって言えば、英雄マノリウレがウルフスカル大洞穴で【ウダイオス】の討伐に使っていたっていう聖剣じゃないですか！」
ウダイオスは強大な力を持つモンスターだ。その姿は羊のような双角を持つ巨大な黒い骸骨で、数百の骸の兵士【スパルトイ】を操る骸の王だ。マノリウレが地上で討伐

してからはオラリオのダンジョン第３４階層【白宮殿】という領域にのみ出現する。
　マノリウレはベルが数多く読んだ英雄譚に登場するエルフの英雄だ。高潔で高貴、魔法と剣を操るハイエルフ（アルトマー）だったと言われており、エルフたちの間では【妖精王】の異名で知られている。
　だがマノリウレがメリディアと繋がりがあった事はあまり知られていない。世間に流通している彼の英雄譚には、
「太陽の光の下で鍛えられし聖剣ドーンブレイカー。彼の王が骸の軍勢を一凪すると、奴らは浄化の光の前に敗走するしかなかった」
　と、記されているだけで、そこには聖剣がメリディアのもたらした物という事が一文も記載されていないのだ。恐らくはデイドラと繋がりがあったという事がマノリウレに負の印象を与えると考えた彼の信奉者たちが、あえてメリディアの名を消したのだろうとザールは考えている。
「そ、それで、ドーンブレイカーを使って、吸血鬼とはどう戦ったんですか!?」
　もはやベルは十歳程年齢が後退していた。目を輝かせ、話しの続きを早く聞かせろとせがむ子供としか言えない状態だ。
「数カ月かけて奴らの居城を見つけた私は正面から乗り込んだ。策を弄さずとも、下っ端吸血鬼であれば一凪するだけで倒せたし、浄化の光に怯えた連中は非常に弱かった。

狼と羊の立場が逆転したわけだな」

だが、とザールは区切る。

「コールドハーバーの娘だけは別格だった。ヤツは斬りつければ蝙蝠の一群に姿を変え、浄化の光を浴びせれば霧になって攻撃をかわす強敵だった。メリディアの加護によってヤツの吸血魔法からは大分守られたが、それでも苦しい戦いには違いなかった」

「それで、それで！　勝ったんですか!?」

「そうじゃなかったらここにいない。ヤツの変身した蝙蝠を一匹ずつ切り落とし、霧を薙ぎ払い、少しずつ傷を負わせた。そしてヤツが回復をするためにモラグ・バルの祭壇に立った所で、私はドーンブレイカーを投げつけ、その実体に直接浄化の光を流し込んで倒した。そういう話だ」

ベルの胸は興奮でいっぱいだった。愛読していた数々の英雄譚に全く劣ることのない戦いの話。それも吟遊詩人の唄伝いではなく、戦いの体験者から直接聞くことができた。ザールは間違いなく本物の英雄と言えよう。

だがそこで気が付いた。確かに胸を締め、躍らせるような冒険譚だったが、肝心のザールがこれまで神の恩恵を受けていなかった理由が話されていない。その事についてベルが指摘すると、ザールは「ここからが本題だ」と言った。

「復讐を終えた私は、今の世の中を生き抜くには神の恩恵（ファルナ）を受ける必要があると考え、流

浪のファミリアへの入団を希望した」

吸血鬼の襲撃の際、仮にザールが神の恩恵を受けていればキャラバンのメンバーは少しは生き残れたかもしれない。そんな風に考えてファミリアへの加入を決めたのだ。

「ところが、そのファミリアの主神が私の背に血（イコル）を垂らした時、それが弾き飛ばされてしまった。どういう事かと言うと、メリディアの僧兵になると言うことは、彼女の眷属になるという事と同義だった」

定命の者は二柱以上の神からの恩恵を受けることはできない。眷属になれるのは一柱の神のみなのだ。

だがメリディアは自分の力を手放したり、制限したりすることを嫌うデイドラだ。創造の神々のように地上に降りていないため、ザールがどれだけ研鑽を積んだところでステイタスの更新はしてくれないし、救国とも言える偉業を成した所でランクアップもしてくれない。さらにデイドラと創造の神々の眷属契約は異なる性質であるため、契約を満了してどこかの神の眷属になったところでステイタスは継承されないのだ。

ザールは慌てて捨教か改宗をメリディアに希望したが、ザールは「１００年間僧兵として働く」という契約をしていたために、その希望は棄却された。

「まあ、そう言う訳で、その契約の１００年が終わったつい半年前まで、私はずっと神の恩恵無しで生きてきたわけだ」

恩恵が受けられなかった分、ザールはそれを補うように武術の鍛錬や、勉学に必死に取り組んだ。戦士や傭兵を引退する道もあったが、吸血鬼との戦いを経て大きな自信が付いていた彼にその選択肢はなかった。

「まあ、吸血鬼を倒すことができたのは間違いなくメリディアの加護によるものだから後悔はないが、お前はデイドラに関わる時は気を付けろよ」

そう言うとザールは何気なく時計を見る。話し込んだので、すっかり遅い時間帯になっていた。

「話が長くなったな。私はもう寝るぞ」

そう言ったザールは食器を片付けると、ソファに横になって瞼を閉じた。

「いやぁ、凄い話でしたね。神様……神様？」

かけた言葉が返ってこなかった事を不信に思ったベルがヘスティアの顔を覗き込むと、彼女は俯いていて、その視線に焦点が定まっていなかった。

「……神様？」

「……ふぇっ!?　な、何だいベルくん！」

ヘスティアはベルが肩に手を置いたとき、初めて気が付いたように飛び跳ねた。

「あの、何か様子がおかしかったように見えたんですけど、大丈夫ですか？」

「あ、ああ、うん。ちょっとバイトで疲れちゃったかな。僕ももう寝るよ。お休み、ベル

君……」

そう言うとヘスティアはいそいそと食器を片付け、寝室に入っていった。

「神様……どうしたんだろう……？」

そんなベルの呟きは、時計のカチカチという音に消えていった。

# 9

朝。誰よりも早く目を覚ましたザールはベルを起こし、二人で朝食の用意をしてからヘスティアを起こした。

今日の朝食は昨夜のサラダに使われなかった野菜を使ってのスープ、サケのステーキに編み込みパン。ドリンクにはミルクだ。

ザールとベルは体力をつけなければと、スープを三杯おかわりし、パンは四つも食べた。

だがヘスティアは微妙に食が進んでいないように見える。ザールは知らず、ベルは知っていることだが、彼女は結構食いしん坊だし、美味しい物は飛びつくように食べる。それが今はかなりゆっくりと物を口に運んでいるし、その視線は食卓ではなく、どこか遠くへ向けられているように見えた。

「あの、神様。大丈夫ですか？」

ベルが心配そうに問いかけると、ヘスティアはハッとした様子で気が付き、食事のペースを上げた。

「だ、大丈夫だよ！　僕は今日も元気――――むぐぅ！」

「うわあ！　急いで食べるからですよ！」
喉に物を詰まらせたヘスティアにコップを差し出す。彼女はそれを受け取り、物を流し込むように一気に飲み干した。
「ぶはぁー。助かったよベル君。ありがとう」
そう言って微笑むヘスティアだが、ベルの目にはどこか乾いているように見えた。
昨晩、ヘスティアは体調が良くないと言っていたし、何か病気でもしているのだろうか。神と言えど、地上に降りている者は権能を封じられ、その身体能力は定命の者と同程度に下がっている。重い病気で命を落とすことはないが、無理をすれば身体を壊すことは十分に考えられた。
「あの、神様。お体の調子が優れないようでしたら、今日のバイトは休んだほうが――」
「な、何言っているんだいベル君!?　僕は元気だよ！　何の悩みもないよ！」
口では大丈夫と言っているが、どう見ても狼狽している。
「……まあ、気付かない内に体調不良なんていうのはよくある事だ。帰りに何か精のつく物でも買ってくるよ」
「あ、ごめん。僕、今夜、いや、何日か留守にするんだ」
ヘスティアはどこからか一枚のレターカードを取りだした。そこには『ガネーシャ主

催　神の宴』と書いてあった。
　お祭り好きな神々は不定期的にだが宴を催す。開催場所や主催者はバラバラだが、オラリオの神が互いに顔を合わせ、情報交換や約束事をするのには良い場所となっているのだ。
　ヘスティアも宴に参加するつもりらしいが、ただ騒ぎたいだけなのか、それとも何か目的があるのかはわからない。
「そうですか……。わかりました。気を付けてくださいね？」
「二人もね。今日もダンジョンに潜るのかい？」
「ああ。だが安心してくれ。一昨日のような事は絶対にさせんよ」
「そ、それは気を付けますから」
　ケラケラとベルをからかいながら笑うザール。
「そっか……。でも、くれぐれも気を付けてくれよ。ベル君がミノタウロスに襲われた例があるように、ダンジョンじゃ何がおこるかわからないんだからね」
　朝食を終えた二人は食器を片付けると、すぐさま鎧に着替え、ベルトに武器を差して冒険者の装いになった。
「それじゃあ神様。行ってきます」
「うん！　行ってらっしゃい！」

ベルは頭を下げ、ザールは片手を上げて、二人は部屋を後にする。

◆

「イヤァッ！」

ダンジョン第４階層の中、正方形構造の天井の高いフロアに雄叫び声が響く。直後、ザールの手にある鋭い刃が巨大なトカゲ【ダンジョン・リザード】を真っ二つに切り裂いた。確認するまでもなく即死。

続けざまに両脇に迫ってきていたコボルト二匹の攻撃を後ろに一歩跳んでかわし、コボルトたちがぶつかったところを見計らって剣を横に凪いで頭部と胴体を切断する。

だがモンスターの群は止まらない。遠方からゴブリン数体が石を武器にして走ってくる。

「ライトニングボルト！　ライトニングボルト！」

ザールは左手を構え、すぐさまライトニングボルトで迎撃し、二発で三体のゴブリンを倒した。残りは以前と同じように剣で迎え撃ち、危なげなく倒す。

自分の視界内からモンスターがいなくなり、周囲の壁にも異常がない事を確認したザールは後ろの方で戦っているベルを見る。

『ブォア！』

「っ！」

相手にしているのはザールと同じくダンジョン・リザードと数体のゴブリン。

ベルはゴブリンの攻撃をよく観察し、右へ、左へ、後ろへと跳ねまわりながらそれを回避する。そしてイラついたゴブリンが大振りの攻撃をしようと腕を振り上げた瞬間を見計らい、その胸にナイフを深々と突き刺した。

その直後、ベルの身体を覆うように大きな影が上から迫りくる。前後の足先の吸盤で天井に張り付いていたダンジョン・リザードが彼にのしかかり攻撃を仕掛けてきたのだ。

慌てたベルはナイフを引き抜いてその場から飛び跳ねる。リザードの巨体がゴブリンの死体を押しつぶした。ほんの一瞬遅れていれば、ベルもああなっていただろう。

体勢を立て直したベルはリザードに跳びかかり、リザードの背中に組み付いてそこへ逆手持ちにしたナイフを渾身の力で突き刺した。

「！」

リザードは一瞬痙攣したかと思うと、すぐに力なく地面に倒れこんで動かなくなった。

「いって！」

その直後、ベルの頭に衝撃が走り、金属音が鳴る。「痛い」と口に出したが、実際は衝撃だけで驚いただけだ。兜を被っていなかったらどうなっていたかはわからないが。

　直後、地面に石が転がる。それが跳んできた方向を見ると、焦った表情のゴブリンが片手を身体の前に出していた。どうやらヤツが投石したらしい。
『ギギィ!』
　大したダメージを与えられておらず、勝てない事を悟ったのかゴブリンは脱兎のごとくその場から逃げようとする。だがその進行方向上にはザールの左手が待ち構えていた。
『グギャッ!?』
　ゴブリンの首を掴んだザールは、その小さな身体を持ち上げて天井に向ける。ゴブリンはジタバタと抵抗し、爪でザールの腕を斬りつけるが硬いキチンの籠手に傷一つ負わせられない。
　ザールは手に力を込めてゴブリンの首をへし折り、離れた所に投げ捨てて周囲を見回す。他にモンスターはいない事を確認し、ザールは剣を鞘に納めてベルの所に近寄る。
「ふう、ふぅ……どうでしたか?」
「勘はそれなりに冴えているし、動きも素早いようだが、基礎はできていないし、無駄な動きが多い。ステイタスに寄りかかっている節がある。
　それと、突き刺す時以外でナイフを逆手持ちにするのを止めろ。それは相手の頭上から跳びかかる時、背後から忍び寄る時、組み技で動けなくした相手に止めを刺す時の持

ち方だ。力は入る反面、リーチが短くなる。お前が素早く相手の懐に飛び込み、弱点を的確に一突きにできるというのなら話は別だがな」

ザールはそう言いながら先日買ったダガーを抜き、ベルに「持っていろ」と自分の剣を鞘ごと渡すと、壁の方へ向いて構えを取る。

その直後、壁に亀裂が走り二つに割れる。そこから犬の頭に人間の身体を持ったモンスター【コボルト】が出てきた。

モンスターはこのように、ダンジョンの壁から生まれてくる。歪な命の生まれ方もまた歪であり、それは生物の神秘に対する冒涜でもあった。

『グルルルルゥ!』

コボルトは目の前にいるザールをすぐさま敵と判断し、臨戦態勢に入る。唇を震わせ、牙をむき出しにし、両手の爪を構えた。

モンスターは生まれたばかりであってもすでに成熟しきっており、すぐに敵と戦えるのだ。

『グワウッ!』

コボルトは後ろ足で地面を蹴ってザールに跳びかかる。その勢いで貫手を繰り出してくるが、ザールはそれを一歩だけ移動して直前で避け、ダガーを一振りしてコボルトから離れる。

直後、コボルトの首筋がパックリと割れ、噴水のような血が噴き出す。コボルトはそれを抑えようと手を当てるが、もう遅かった。流れる血は止まらず、コボルトはだんだんと力を失っていき、最後には膝から崩れ落ちて絶命した。

ザールはダガーを鞘に納めてベルの下へ戻り、剣を受け取ってベルトに固定しなおす。

「正面から敵と対峙する場合、ナイフは技量を要求する武器に変わる。剣や斧のように、与えた傷がそのまま致命傷になるという事は少ない。

今はまだ力任せに振っているだけで死ぬような敵しかいないが、ダンジョンは下に行くほどモンスターは強くなるそうだ。そうなると、今のままではお前の戦法は通じなくなってくる。

首や手首の動脈、足、腹。隙を見て相手の弱点になる部分を斬れ。不可能な場合は一度だけ斬りつけろ。相手が斬撃で傷つかないほど硬い場合に限り逆手持ちにしろ。

だが複数戦の場合、絶対に突き刺すな。骨や筋肉に引っかかって抜けにくくなれば、それだけで動きが止まるし、最悪その隙に攻撃を食らうことだってありえる。

これを良く覚えておけ」

ベルはいつの間にか取り出していたメモ帳に大急ぎでザールの言った事、やった事をメモしていく。

自身の技術を他者へと伝授する。ザールはこれまでにない体験に奇妙な充実感を覚えていた。だがそれはまだ早いと意識を改める。本当に満足していいのは、ベルがザールの教えによって成果を上げた時だ。それまでは満足などしていられない。

「小僧、バックパックの中身はどうだ？」

「ハイ！　ええと、もうそろそろ満杯です。あとはさっき倒したモンスターの魔石の分くらいだと思います」

「私の方もだ。一旦地上に上がって魔石とドロップアイテムを換金してからまた戻ってくるとしよう」

第1階層から第4階層までに出現するモンスターの魔石や素材は大して値段がつかないので、収納が満杯になったら地上に上がって換金。そしたらまた潜るといった事をした方が収益は良いとベルから教わった。地上への距離は差ほど離れていないが、戦闘時間を考えると、一日六往復が限界だろう。

二人は一旦地上へ戻る事にした。道をよく知っているベルを先頭にし、ザールが周囲の壁や後方に気を使いながら戻る。行きとは逆の隊列だ。

現れるモンスターを適当にあしらいながら進んでいき、第1階層の半分ほどの所まで来ると二人以外の冒険者の姿も目立つようになってくる。これからダンジョンへ向かう者、帰る者と様々だ。

やがて二人は『始まりの道』という横幅が限りなく広い大通路を進み終え地上へと繋がる大穴下までやってきた。

高さ１０Ｍ、直径も同様の円筒形の穴で、円周に沿うように緩やかな銀色の螺旋階段が設けられている。それを登っていくとバベルの地下一階、初日にザールが追い返された所に出た。

やはり広いが、何百人もの冒険者でひしめき合っている。二人はその人の波を避けるように壁際を伝って換金所へと向かう。

「あれ？」

ふと、ベルが足を止めた。その視線は前ではなく、ダンジョンの穴から離れた場所に向けられていた。

「どうした？」

「ああ、いえ。あれ、なんだろうって思って……」

ベルが指さした先には巨大な荷車と、その上に乗せられたこれまた巨大な物資運搬用の収納ボックスがあった。それも一つや二つではなく十数個もある。

この手の荷車は大手のファミリアが遠征の時に用いる。食料、薬、道具、予備の装備の運搬、魔石やドロップアイテムの格納などに使われることが殆どだ。

「どこぞの派閥が長期的にダンジョンに潜るために用意しているんじゃないか？　確

か、【遠征】とか言ったか」

オラリオにおける遠征という言葉が覚えたてのザールは思い出すように言った。

「そうだと思っていたんですけど……あれ、動いていませんか？」

その指摘を聞いて再度見直すと、確かに箱が動いていた。遠くからではわかりづらいが、目を凝らして見るとそれがわかる。内側に閉じ込められた何者かが暴れているようだが、荷台に頑丈そうな鎖でしっかりと固定されているため箱が揺れる程度に納まっている。

「箱の大きさを考えると、中に入っているのはモンスターか？」

閉じ込められているのはモンスター。だがそう考えると不思議な事だ。

バベルは遥か昔、デイドラと並んで世界を脅かしていた大量の【ダンジョンのモンスター】が地上に溢れてこないように、ダンジョンに蓋をするために建造されたという話がある。

ベルを襲った【ミノタウロス】というモンスターは別の冒険者に一撃で倒されたというが、神の恩恵を受けていない兵士ならば完全武装の上、三十人規模で当たらなければ倒すことはできない。

つまり、種類の差はあれどモンスターは一体だけでも十分に脅威なのだ。そういった怪物たちを地上へ出さないためのバベルであるはずなのだが、あの荷台は何故それを外

に運び出しているのだろうか。
箱の周りをよく見ると、箱の警護をしている冒険者とギルドの制服を着た人物が何やら話し合っている。つまり、この行為はギルドが関わっているという事だ。
「ん？　おい小僧。これじゃないか？」
ザールが壁に貼ってある張り紙を示す。そこには【怪物祭（モンスターフィリア）】なる言葉が大文字で記されていた。
祭か何かのようだが、開催日以外に詳細は記されていないので具体的な内容はわからないが、言葉の響きからモンスターに関係のある物だという事は察せられる。
「怪物祭……うーん、聞き覚えがありませんね。僕がオラリオに来たのは一週間くらい前なので、もしかしたら毎年やっている事なんでしょうか？」
「さあな。だが祭か……美味い物と酒にありつけるチャンスかもな。よし、早く換金してまたダンジョンに入るぞ。開催日は数日後のようだし、それまでに金を溜めておこう」
「あ、待ってくださいよ！」
足取りが軽くなったザールはベルを置いて急ぎ足に歩き出し、ベルは慌てて彼を追いかける。ベルはザールにも子供っぽいところがあるな、と内心呟くのだった。

◆

バベルの頂上で、女神は窓に手を当ててオラリオを取り囲む外壁、その上の見張り台同士を結ぶ渡り道を見ていた。そこにはキチンの鎧で身を包んだ戦士と、白髪の少年が刃を潰した剣とナイフを使って訓練をしていた。

この渡り道は滅多に人が来ないため、訓練をするには最適な場所なのだが、嫌な物がよく見えるため女神にとっては腹に据えかねる所でしかなかった。

（濁りはじめている……ほんのわずか、純水の中に一滴だけまじった泥水程度……でも、水の中には広がる）

女神には定命の者の内に宿る物が見える。それは俗に言う魂だ。人種の物は基本的に黒い色をしているが、まれに彼女を魅了する美しい色を持った者がいる。そういった色の魂を持つ者には歴史を変える素質や才能がある。彼女はそういった魂を収集することが好きだった。

だが、そのような魂を持っている者であっても、耐えがたい苦痛に苛まれたり手ひどい裏切りに直面したりして、色がくすんだり汚れたりしてしまい、素質が消えてしまう者がいる。

女神が見る少年の魂は純白だ。世界で最初に振った雪のように、混じりけがない白。その筈だった。

（手を打つ必要があるわね……）

オラリオの頂点で生まれた殺意は、静かに策謀を巡らせる。

◆

夕陽に照らされたオラリオの城壁の上で、ザールとベルは刃を潰した武器を使って撃ち合い稽古をしていた。通常は木剣を使っての訓練で互いに怪我をしないようにするのだが、ザールは回復魔法が使えるので多少の怪我をしても大丈夫だった。

「うぐっ！」

刃を潰したところで鉄の棒。それはベルの身体に強く打ち付けられる。

「目をつぶるな！　剣がお前の体を切り裂こうと視線を逸らすな！」

ザールの指導は容赦がなかった。そう、多少の怪我の心配がないということは、少しも遠慮する必要がないということでもあった。すでに全身を痛みが爆走しているが、ザールの連続攻撃はベルに痛みに悶える隙を与えなかった。

「う、うおおおおおお！」

このままでは何もできずに痛めつけられるだけだと判断したベルは攻勢に出た。両足を踏ん張りナイフを振りかぶりながら前に出る。

だがザールはそれに合わせるように後ろに跳び、目の前を通り過ぎようとするベルの腕を逆に打ち付けた。

「あぐっ！」

痛みによってベルが取り落としたナイフを、ザールは横蹴りにして遠くに弾き飛ばした。思わずベルが目で追った所で彼の胴体に蹴りを入れる。

「落とした武器を追いかけるな！」

蹴り飛ばされたベルは宙に浮いて床に投げ出される。口からは血が流れた。

ザールは剣を鞘に納めてベルに近寄り、左手を向ける。

「【メリディアよ　光の女神よ　命の輝きに薪をくべよ】【治癒の光（ファースト・ヒアリング）】」

全身の痛みが光に溶けていく。見えない所の傷も、内臓の負傷も癒えていく。だがこれは喜ばしいことではない。もしもザールの使った魔法が【治癒の光（ファースト・ヒアリング）】ではなく【ライトニングボルト】であったのならば、ベルは死んでいたからだ。

そうでなくてもベルの身体を打ち付けた剣に刃がついていたとしたら、彼はすでに十回は死んでいただろう。

「そろそろ私の精神力が尽きてきた。今日はここまでにしておこう」

「ハァ、ハァ、ハァ、は、はい……」

ザールが左手と入れ替えるように差し出した右手を掴み、ベルは起こされた。

「ほら、血をふけよ」

「あ、ありがとうございます」

差し出されたハンカチを受け取り、ベルは口元の血を拭き取った。

「今日は結構稼げたし、バスケットを返すついでに豊穣の女主人で夕食もすませていこう」
「わかりました」
そう言って二人は本拠地へと向かう。訓練後の汗と血まみれの恰好で飲食店に入る訳にはいかないし、仮にそんな事をしたら女店主（ミア）に叩きだされるだろう。戦場でないなら身体は常に清潔に保つべきだ。
ベルはザールの後についていきながら彼に言われた事を頭の中で復唱する。そして、先ほどの訓練の時にどうすればあれほどまでにやられなかったのかを考えることもした。
（目をつぶらなければ、あの時脇腹や足を斬られることもなかったよな。もしもあれがモンスターの爪や牙だったら、僕はもう餌になっていた。ダンジョンでは気を付けよう。
でも、武器を追いかけるなっていうのは、どうすればいいんだろう？　距離を取る？
でもザールさんが相手だったらすぐに距離を詰められるよな……）
うんうん唸りながら戦い方を考える。ベルもエイナによる【妖精の試練】を受けた事があるので考える事は慣れているが、今回の問題は難しく感じていた。
ふと、ザールがベルの様子に気付いたように振り返る。

「大丈夫か？　どこか治っていないところでもあったか？」
「あ、いえ！　ザールさんの魔法のおかげで怪我は全部治りました！　大丈夫です！」
「そうか？　まあ、念のために精神力が回復してきたらもう一度回復魔法をかけるか」
再び歩きだす二人。
もうすぐ本拠地という所で、ザールが口を開いた。
「お前はこれまで適切な訓練もなしに戦ってきたんだ。すまんが、矯正できるまでしばらくつらいと思うが、ついてきてくれよ」
ザールの言葉はベルを気遣っての物だった。物を教える時や、訓練の時は鬼のようだが、それ以外では基本的に優しい。
厳しくも、自身を気遣ってくれるザールの姿に、ベルは何か知らない感情が湧いてくるのを感じていたが、今はそれが何なのかは知る由もなかった。
「はい！　頑張ります！」
ただ、今は力強く頷く他はない。
「そうか。なら明日はもっとボコボコにしてやるか」
「はい！　……え？」
だが少し後悔もしていた。

# １０

日が落ちた頃。相変わらずの繁盛ぶりを見せる【豊穣の女主人亭】で、ベルとザールは店の壁際の席に腰掛けていた。

ベルの取り皿の脇には雲のように白い泡のエール、ザールには東方から伝わってきたという芋の蒸留酒がある。小さい陶器の酒瓶に、これまた小さい陶器の椀のようなコップ『御猪口』に注いでちびちび呑むのが良いらしい。

「お待ちどうさまです～！　ベルさん！」

銀髪のヒューマンの給仕【シル・フローヴァ】と、愛想の無いウッドエルフの給仕【リュー】が料理を持ってくる。リューはメインディッシュをテーブルの中心に置き、シルはこれ以上ないくらい嬉しいと言いたげな笑顔でお盆の上の小さなつまみをメインディッシュの周りに並べる。

テーブルの中心に鎮座するのは、山盛りのミートボールパスタが積まれた大皿だった。最初にベルがこの店に来た時に出されたパスタよりも多い。

ベルはあまりの量にその目を点にし、ザールは「おお、凄いな」と感心する。

「ベルさんが常連さんになってくれるなんて、私うれしいです！　い～っぱいサービス

しちゃいますね！」

「ちょ、ちょっとシルさん！　恥ずかしいですって！」

ベルの席の横手にまわり、彼の取り皿に料理を乗せるシル。ザールは軽く店を見回したが、他の店員が彼女のように客にサービスしている様子は少ない。シル以外では唯一、黒髪の猫人（キャットピープル）が可愛らしい面持ちの小人（パルゥム）に同じことをしているだけだ。

さりげなくテーブルの横に目をやっても、リューがシルと同じようにザールの取り皿に取り分けてくれそうな様子はない。

（まあ、ボズマーなんてそんなものか）

ダンマーとて他種族の事を言えないくらい傲慢で気位が高いのだが、自分の種族を悪く言う者は少ない。ザールもその例に漏れず。

ザールはフンッと鼻をならして御猪口の中身を全て口に含む。酒気の強い酒で、どことなくスジャンマに似ている気がした。恐らくこれも芋をつかった酒なのだろう。

酒の力で遠慮がなくなったザールは、右手に持ったフォークと左手に持ったスプーンをパスタの山に挟み込むように突っ込むと、その殆どを持ち上げて自分の皿に突っ込もうとする。

「ああ！　レヴァンさん何やってるんですか！」

このままでは自分の分がなくなると思ったベルは、慌ててフォークとスプーンを握っ

てザールがやったように彼が持ち上げたパスタを挟み込んで強奪を阻止した。
「町娘然り、ギルド職員然り、女神然り、お前は女に恵まれているようで幸せに見えたからな。その分、年長者にご馳走するという気概を見せるべきではないかね？」
「は、はあ!?　何言っているんですか！　わけのわからない事言って、僕の分まで取らないで、くださいいいいいいいいいいいい……！」
パスタを奪い取るためにベルは自身のステイタスを無駄使いし、何とか強奪を防いだ。だが甘かった。
ザールはベルが下に引っ張るならとあえて力を緩め、ベルの抵抗が少なくなった瞬間を見計らいフォークとスプーンをクルクル回してパスタを巻きつけ、奪取不能な部分を切り離して塊になった分を自分の皿にのせた。最初に取った時よりも少ないが、大皿の中に残っているベルの分よりはずっと多い。
「あああぁぁぁぁぁぁ……」
意気消沈するベル。食事は割り勘であるため、多く食べた方が得なのだ。
「ステイタスに頼りすぎるなと言ったはずだ。これは私の教えを守らなかった分の罰金としていただく」
そう言い放ちザールはパスタを食べ始めた。大きいミートボールがゴロゴロしたボリューミーな食べ物だが、ザールには丁度いい。精神力の回復にももってこいだ。

「うう、僕の晩御飯……」
めめそしながらベルは大皿の上の残ったパスタを取り皿の上にのせて食べ始める。一応腹ペコになることはないだろうが、彼は損をした気分になった。
「もう！　大人気ないですよ！　あなた、もう百歳越えているんでしょう!?」
頬を膨らませたシルが抗議する。無論、本気で怒っているわけではないが、ザールは左手のスプーンを置いて酒瓶を持つと、それをシルに見せるように持ち上げてヒラヒラと動かす。
「戦場では常に素早く物事を判断する判断力と高い技量が物を言う。今回は私の勝利だ。文句があるなら、お前が私に酌でもしてくれるかね？　そうすれば小僧に分けてやっても……その手はなんだ？」
「リ、リューさん……？」
そっと、リューはザールの酒瓶に手を添えていた。それこそその動作が終わるまで誰も気にも留めなかったほどに、そっと。力は弱く、ただ動いていたザールの腕を止める程度でしかないが、どことなく威圧感があった。
リューは口を動かさず、ただじっとザールを見つめているが、その視線にはザールの手首を握りつぶすか、切断できるぞとでも言いうような無言の主張があった。
ザールは思わず腰の剣に手を出しそうになったが、下手に動けばどうなるかわかった

ものではないのでやめた。
恐らくリューはザールより強い。十分に距離を取っていて、しっかりと準備ができていればわからないが、この近距離では勝てる見込みはないと思えるほどに。
「酌なら私がしよう」
リューはそう言ってザールから酒瓶を取る。受け取っただけの筈だが、何故だか奪い取ったように見えた。
「……そいつはどうも」
警戒しながらも、ザールは御猪口を取ってリューに差し出す。左手を添えて酒を注ぐ美しいエルフは非常に絵になる。嫌味ったらしいほどに丁寧だ。
「あまり友人を困らせないでほしい」
「肝に銘じておこう」
リューは酒瓶をテーブルの上に添えて他の業務へと移っていった。
「私はこの店に来るたびに威圧されているが、表に『ダンマーお断り』とでも書いておいたらどうだ？」
「もう、そういうこと言っているとまたリューに怒られますよ？」
「ハイハイ、老いぼれはもう沈黙するよ」
拗ねたザールは以後、一切口を利かずに食事にとりかかることにしたようだ。もっと

も、酒が入っているので今後どうなるかはわからないが。
「あははは……あ、そうだ。シルさん」
「はい。なんですか？」
子供のようなザールに苦笑いをこぼすしかなかいベルは突然思い出したように声をかけた。
「ダンジョンから戻ってきた時に【怪物祭（モンスターフィーリア）】って書いてある壁紙を見かけたんですけど、それってどういった催しなんですか？」
「え？　ベルさん知らないんですか？」
「はい。実は僕もレヴァンさんもオラリオに来たのがつい最近で」
「そうなんですか。じゃあ、私が教えてあげます」
シルは一息置いて説明を始める。
「【怪物祭】は年に一度開かれる大きなお祭りです。東地区の闘技場を舞台にして、ダンジョンから捕まえてきたモンスターの調教をするんです」
「ち、調教……？」
「はい！　モンスターと調教師が格闘して、モンスターをおとなしくするまでの流れを見世物にするんです。私のような冒険者でない一般市民がモンスターを間近で見られるのは、この日以外は殆どないんですよ」

　単なる見世物のためにモンスターを地上に持ちだすのは、いささかリスクが高くはないかとザールは考える。恐らく、モンスターの脅威や冒険者の強さを一般に見せることにより、冒険者やギルドの重要性を知らしめる目的でもあるのだろう。
「それに、公開調教だけじゃなくていろいろな屋台や出店が出てくるので、美味しい物を食べたり飲んだりという方面でも楽しめるんですよ」
　ザールの狙い通りだ。オラリオに来て日が浅い彼が色々な珍味に巡りあうのにはうってつけの機会だろう。
「へぇ～、それは楽しみです！　ね、レヴァンさん！」
「……」
「まだ拗ねてるし……」
　黙々と食事を続けるザール。どうやら店から出るまで喋るつもりはないようだ。
「フフ、当日はとっても楽しくなりますから、ベルさんも楽しんでいってくださいね」
　そう言ってシルは二人の席から去って行った。カウンター席の向こうのミアの堪忍袋がそろそろ温まってきたのを見計らったのだろう。
「屋台に出店かぁ……、当日までに神様が戻ってくるといいですね」
「……」
「まだ拗ねてるし……」

◆

怪物祭の前日、朝早く街壁の上に来たベルとザールはいつものように稽古をしていた。

ここ数日の稽古でザールの攻撃から目をそらさなくなったベルは、彼の剣をナイフで受けるが、その衝撃が伝わったことで痺れた腕が動きにくくなる。

「筋力で負けている相手に防御なんて考えるな！　回避に専念し、足さばきや跳躍で自分を最適な位置に置いて戦え！」

「は、はい！」

ステイタスの上ではザールより上でも、素の筋力や技量の差によって今のベルではザールの攻撃を受けるのは無謀だ。不意の攻撃によって動けない場合を除いては回避に専念する方が良いだろう。

「イヤァッ！」

ベルは前と同じように前に出るが、ナイフを振りながらではない。対象が自分の間合いに入ってから攻撃するように決めたらしい。これならザールが距離をとってもそれを追いかけて攻撃することができる。

踏み込みと同時にナイフを振るおうとするが、それがかなう事はなかった。ベルの腕がナイフを振る前にザールの左手が伸び、その腕を抑えてしまったからだ。

拘束を振りほどこうと力を入れるも、ザールが首筋に当てた剣によって身体が静止してしまう。ベルの負けだ。

ベルの腕を放したザールは、その流れで【治癒の光（ファースト・ヒアリング）】を唱えてベルを治療し、剣を鞘に納めた。

「小僧。ここで問題を出しておきたい」

「ハァ、ハァ、ハァ……問題？」

息を切らすベルに問う。

「戦いにおいて最も重要な事はなんだと思う？」

その問いは素人のベルには難しい物だった。恐らくこのオラリオでも答えられる者は少ないだろう。戦闘を生業とする者に関わらず、ただモンスターをぶちのめして魔石を獲得するだけで良いと考える冒険者は実際多い。そして、そう言った者が真っ先に死んでいく。

これを理解しているかしていないかでは、その生存率にはかなりの差が出ると言っていいだろう。

「えっと、相手を抑えるだけの力ですか？」

「まあ、力は最低限必要だがそうじゃあないな」

「なら、相手に掴まらないだけの素早さ？」

「ほう、惜しいな。だが少し違う」
「じゃあえっと、弱点を的確に攻撃できるだけの器用さとか」
「正解から遠のいたぞ」
「……高級な装備を買えるだけの財力、ですか？」
「殴られたいのか」
拳を振り上げるザールに慌てて「わー！　ごめんなさい！」と謝罪するベル。
「まあ、この答えはお前では自力で導き出せる可能性は少ないだろうな」
「……それってどういう意味ですか？」
馬鹿にされたと感じたのか、ベルはムッした表情になる。
「そうムキになるな。これはお前の性格の問題だ。お前が馬鹿だとか言っている訳じゃあない」
腰ベルトの模擬剣を鞘ごと外し、手すりに立てかける。そして代わりにダガーを抜いて構える。
「来い。口で言ってもわからんだろうから、身体で教えてやる」
挑発にも聞こえる言葉。頭に血が上ったベルは、床を蹴って跳び出した。作戦としてはザールの目の前で攻撃せず、急転換して真横に移動して攻撃するというものだ。
ザールの目の前で急転換しようとした瞬間、ベルは盛大に転んだ。

「ぶっ！」
顔から床に叩きつけられる。顔を上げれば、鼻から大量の血がどばっとあふれ出した。
「単純な作戦だ」
ザールを見ると、片足を出した体勢でいた。どうやらベルのやりたい事を察知して足を引っ掛けて転ばせたらしい。
「小細工が通用すると思うな。立て」
更なる挑発。ベルは鼻血を拭い。ナイフを構えてザールに向かう。
「ヤアアアアアアアッ！」
自身の素早さを活かした連続攻撃。ザールはそれをダガーで受けるが、ジリジリと後退っているように見えた。
（っ！　行ける！）
ザールを押し切れると踏んだベルは攻撃速度を増していく。ザールはダガーを逆手持ちに変え、防御の姿勢で攻撃を受ける。
それを弱腰の姿勢と見たベルは、さらに攻撃の手を加えていく。
そして、とうとうザールのダガーが弾かれて、防御姿勢が崩れたように見えた。
（このまま！）

大きく振り上げた一撃。
だが。
「やはり単純」
ザールは右足を軸にし、回転するような動きでベルの真横にまわった。ダガーは通常の持ち方に戻っている。
（え？）
その疑問符を声に出す前に、ベルの背中にダガーの柄頭が叩き込まれた。
「かっは！」
そして、再び床に叩きつけられる。
ザールは左手を構え、再び治癒魔法をかけた。
「ハァッ、ハァッ、ハァッ……うぅ」
何もできない。悔しさがベルの胸の内にこみあげる。身体の痛みは消えたが、心の痛みがジグジグと響く。作戦は実行する前に阻止され、必死の攻撃はうまくいったかに思えていたが実際にはザールの攻撃へと誘導されているだけだった。情けなくて涙まで出てくる。
（ふむ、やはりまだ早かったか）
ザールは手を差し伸べようとして、止めた。今のベルにそれをやるのは情けをかける

事と同じで、男のプライドに傷をつけるだけというのを理解していたからである。
壁に立てかけていた模擬剣を拾い、倒れ伏すベルに背を向けた。
「先に行っている。今日、行く気があるのなら西の広場の噴水の前で待っている」
そう告げてザールは去って行く。
このまま寝転がって泣きはらしていれば、何と心が楽になることだろうか。何もしないままでいて、不当だとわかっているザールへの怒り、自分への怒り。それらをループさせる事によって生まれる心地よい自己嫌悪の殻の中。永遠にこもっていれば傷つかずに済むという考えさえ浮かんでくる。
（……でも）
石の床に手をつき、膝をつき、ベルは立ち上がる。
（こんな情けない姿で……あの人に追いつける訳がない！）
殻を打ち破ったのは一つの憧憬、金糸のような長いブロンドの髪。ベルが求めてやまない一人の女性。彼女への想いがあの日、酒場で馬鹿にされた時にダンジョンへ向かう原動力となったのだ。
（叩きのめされたからなんだ！　僕は冒険者だ！　ダンジョンに行くんだ！）
眉を吊り上げ、歯を食いしばり、ベルはザールの後を追った。

# 11

今日は年に一度、オラリオがいつも以上に湧き立つ【怪物祭（モンスターフィリア）】の日だ。
ザールとベル、他の冒険者たちの殆どもこの日ばかりは武装を解除し、ダンジョンに潜らないで一日を楽しむ。
有名店や的屋の屋台には異国の珍しい品、美味しそうな料理や飲み物などが並んでいた。
「いやぁ、これが怪物祭か。これまでいろいろな所の祭を見てきたが、オラリオ程（こ）盛り上がっているところはそうそうなかったぞ」
鎧を着ていないザールの恰好は伝統的なダンマーの衣装だ。アッシュランドに群生するキノコや植物を錬金術で加工した染料を用いて青色に染色されており、また過酷な火山地帯でも着用者を守るために防塵加工が施されている。
その後ろについてくるように歩くベルだが、その表情はどこか落ち込んでいる。いや、落ち込んでいるというよりは、難しい課題に頭を悩ませているといったほうが正解だろう。
あれからザールの言った事の答えを考え続けたが、結局怪物祭の日になっても結論は

出なかった。
「おい、どうした？」
「……あっ！　いえ！　なんでもありません！」
慌てて首を振るベル。心ここにあらずといった状態で、楽しみにしていた祭のことも頭から抜けていた。
「そうか。まあいい。それよりも、あの屋台に売っているものはなんだ？」
そう言ってザールは少し軽い足取りで屋台へと向かった。
ベルはその背中を見て、いつもの厳しい師匠とはとても思えないと考える。オンオフの切り替えも一流の戦士には重要なのだろうかと、少し深読みしすぎながらもザールを追った。
「おい！　これ二つおくれよ！」
客と応接する方に背を向けている、フードで頭まで覆った売り子にザールが声をかけた。すると、売り子の動きがピタリと止まった。
「その声は、レヴァン？　レヴァン・ザールか？」
驚いたようなしゃがれた声を出しながら売り子が振り向く。すると今度はベルとザールの二人が驚く番だった。
フードから覗いている顔はまるっきりトカゲだった。緑色の鱗状の肌で、出っ張った

口、離れた目は人より小さく瞳孔がまん丸だった。
ベルは一瞬、地上にダンジョンのモンスター【リザードマン】が現れたのかと身構えそうになったが、服を着ているし、何より言葉を発した事でなんとか踏みとどまる。もしかしたら、いらない騒動を起こす可能性があると瞬時に察知したからだ。
ザールはというと、その驚きはベルのものとは違っていた。
「お前、浅瀬の一等星か!?」
「そうさ。俺のことは忘れていないようだな」
「当たり前じゃないか！　友よ！」
嬉しそうな声を上げながら、ザールは屋台のトカゲ人間、【浅瀬の一等星】と呼んだ彼の肩を叩いた。浅瀬の一等星の方は一見すると表情は変わっていないように見えるが、ベルの目にはニヤリと笑ったように見えた。
「元気そうで何よりだ。お前もオラリオに来たんだな」
「ああそうだ！　お前が誘ったようなものだからな！　今はヘスティアという神のもとで働いているよ」
「ヘスティア……聞いたことはないな。最近発足したばかりの派閥か？」
浅瀬の一等星の言葉に「ああ」と答えたザールは、今度はベルの肩を叩く。
「構成員は私とこの坊主の二人だけ。まだ発足して一月ほどだそうだ」

「なんだって？　お前ほどの腕があれば、あのロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリアにも入れたと思うが」
　ザールの表情が曇る。
「ああ、まあ、そうだな。その二つの所には行ってなかったが、その、面接を受けた所で不当に不合格を言い渡されてな。わかるだろう？」
　浅瀬の一等星はザールの事情を察したようで、コクリと頷いた。彼も同じような経験があるため、ザールの言いたい事はすぐにわかるのだ。
「まあ、暗い話はなしにしよう。どうだ？　スローターフィッシュのケバブ。お前は友人だから、特別割引で提供してやってもいい」
「ほう、この辺りでは珍しいな。悪くない。二つくれ」
　ザールが財布を取り出して二人分の代金を渡すと、浅瀬の一等星がマチェーテ包丁を手に取り、魔石オーブンで回しながらまんべんなく焼かれている大きな魚の一部をそぎ落とし、それを薄い生地のパンに野菜と一緒に挟み、最後にソースをかけて二人に渡した。
「まいどあり。今度二人で飲みに行こうぜ、友よ」
「勿論だ。それじゃあ、また今度！」
　去り際にベルが浅瀬の一等星にお辞儀をし、ザールについて歩く。見ると、ザールは

既にケバブに口をつけていた。どうやら歩きながら食べても問題なさそうだ。
ベルも思い切ってケバブにかぶりつく。淡白な白身魚とシャキシャキのキャベツ、そして甘辛いソースが絶妙にマッチした味わいだった。
「モグモグ……あ、そうだ、レヴァンさん。あの、人……人？　なんでしょうか？　お知り合いですか？」
「うまいうまい……。ん？　ああ、そうだ。ヤツは私の傭兵仲間、いや、元だな。元傭兵仲間の浅瀬の一等星だ。私がオラリオにくることのきっかけになった男だ」
「きっかけ？」をベルは首をかしげる。
何を隠そう、ザールがオラリオを目指すようになるきっかけを作った傭兵仲間とは浅瀬の一等星のことなのだ。彼が聞いた話によると、【イグ】という神のもとで働いており、現在はＬｖ．２になっているそうだ。
（ザールさんには知り合いが多いとは思っていたけど、蜥蜴人間の傭兵だなんて驚きだなぁ）
ぶっきらぼうだが面倒見がよく、酒もよく飲むから知り合いは多いだろうとベルは考えていた。
「わかるぞ。お前、蜥蜴人（アルゴニアン）を見るのは初めてだろう？」
ザールの問いかけにベルは「はい」と答える。

「熱帯雨林の国【ダーク・スポット】の亜人種だ。犬人や猫人（シアンスロープ・キャットピープル）よりも動物に近い見た目が特徴だな。驚いただろう？」
「ええと、はい。今まで見た亜人の人たちは、どっちかって言うと僕たち（ヒューマン）に近い見た目でしたので」
「ダンジョンでそれらしい種族を見かけたら気を付けろよ。うっかり先制攻撃してトラブルに、なんてことになったらシャレにならん」
　実はその勘違いのせいでザールと浅瀬の一等星はひと悶着あった事があるのだが、今では友人と言えるまでに関係は修復している。
「あの、そう言えば、どうしてザールさんはあの人の事を二つ名で呼んでいるんですか？　やっぱり、冒険者みたいに名の知れた傭兵同士も、そういう風に呼び合うものなんでしょうか？」
「二つ名？　ああ！　違う違う。あれはあいつの名前だよ」
　ベルの頭に疑問符が浮かぶ。
『浅瀬の一等星』。どう見ても普通の名前には見えない。称号とか二つ名としか言いようのない響きだ。その疑問にはすぐにザールが答えた。
「アルゴニアンの名前はヒューマンに近い種族には発音しづらい、あるいは聞き取れない物があってだな。ヤツの名前も音にすると、シューシューシュー、という感じだが、な

んて言っているかわかるか？」
「い、いいえ。さっぱり聞き取れませんでした」
「そうだ。だからアルゴニアンには本名とは別に、人に近い種族に向けた【ヒスト名】という別の名前があるんだ。」
　ヒスト名はそのアルゴニアンの子供の頃の行動などにより決められる。例えば、沼地でよく動き回る子供時代だったのなら【湿地帯の斥候】という名前がついたり、こっそり酒を飲んで怒られたことがある者には【深酒を呑む者】という名前がついたりする。
「へぇ。じゃあ、あの人の名前の由来っていうのも、何かあるんですか？」
「ああ。確か前に聞いた話によると、密林を探検して迷子になった時、持ちだしていた魔灯石を光らせて大人たちに見つけてもらったそうだ。それで、いた場所が沼の浅い所だったからそういう名前になったと聞いているな」
　何とも間抜けなエピソードだったが、異文化というものに触れたベルはそれが面白かった。
「さて、スローターフィッシュのケバブはなかなか美味かったな。アイツもいい仕事をする」
「レヴァンさん！　次はあれなんてどうですか？　ヤムヤム悪魔風卵って、なんだかおもしろそうな食べ物じゃありません？」

「おっと、待てよ。あっちのクアンタムジュースというのもなんだか気になるな」
　オラリオの珍しいグルメを存分に満喫する二人。また、グルメだけではなく小物屋が風変りなアクセサリーなどを売り出していたりもする。珍しいところでは木彫りの熊の置物が売っていた。
　オラリオの祭。それはザールが体験したどの祭典よりも、大きく賑わっていた。
「ん？　おーい！　そこの白髪頭とおっかない顔のおじさん！　待つニャー！」
　ふと、二人が呼び止められた。声をかけられた方を見ると、そこには豊穣の女主人の店員の猫人のアーニャがいた。彼女も両手いっぱいに食べ物や飲み物を抱えているようだが、私服ではなく給仕服なのはどういうことだろうか。
「サボりか？」
「ニャ!?　ひ、人聞きの悪い事を言うものじゃニャいニャ！　ミャーはシルの忘れ物を届けるためにちょいと抜けてきただけニャ！」
「忘れ物？」
　アーニャは食べ物を小脇に抱えて懐をまさぐり、そこから財布を取りだした。
「シルはおっちょこちょいニャ。店番サボって祭り見に行ってるのに、財布を忘れて行ったからミャーが届けに行ってやる所ニャ」
「どう見てもお前の方がサボって祭を楽しんでいるように見えるが？」

「ち、違うニャ！　シルを探している途中でお腹がすいたからちょっと早めのランチを楽しんでいるだけニャ！」
　アーニャは慌てて弁明しながらベルに財布を持たせた。
「ミャーはそろそろ戻らないとヤバいニャ。だから白髪頭。シルのマブだちのおミャーが代わりに届けてくるニャ」
「ええっ。僕でいいんですか？」
「大丈夫ニャ！　おミャーは食い逃げしたけど他人（ひと）の財布をパクるやつには見えないニャ！　じゃ、しっかり頼むニャー！」
　アーニャはそう言い残して、すたこらと店のある方へ駆けて行った。
「ヤバいって、やっぱりサボってたんじゃ……。でも、僕たちシルさんがどこにいるかわからないんですけど」
「十中八九祭りの目玉である公開調教（テイム）を見に行ったんだろう。そっちに向かっていればそのうち会えるかもしれん」
「じゃあ行きましょうか」
　取り敢えず、二人も闘技場を目指して歩くことにした。無論、道中でグルメを楽しみながら。